

谷家所蔵「谷干城関係文書」目録並びに解題

小林 和幸

解題

ここに掲載する「谷干城関係文書」は、谷干城の曾孫にあたる谷元臣氏が、今日まで所蔵してこられた陸軍軍人で政治家、貴族院子爵議員をつとめた谷干城の関係史料である。

よく知られているように谷干城の史料は、谷干城の没後、島内登志衛編『谷干城遺稿』上・下巻（靖献社、明治四五年刊）として刊行されている（その後、一九七六年に続史籍協会叢書で四冊本として復刻）。これには、谷干城関係史料の内、主要なもの（回顧録・日記・意見書・書翰（来翰と発翰））が収められており、戦前から多くの研究者に利用されてきた。但し、没後約一年という短期間で編纂された故か、字句の異同、年代推定などにおいて不確かなものもある。

この『谷干城遺稿』に収載されたもの及び未収載のものも含め、谷干城関係史料の原物についてだが、一九六二年、その一部を古書店より立教大学が購入した。この立教大学購入史料は、元は谷家所蔵史料であつ

たと思われるが、谷家から離れた時期は、谷家御先代の儀一氏の頃であつたと考えられ、現御当主の元臣氏によるとその経緯は不明と云うことである。同立教大学購入史料は、同大学の海老沢有道・林英夫両教授によつて目録が作成され、一般にも公開された。さらにこの立教大学所蔵「谷干城関係文書」は、一九九五年北泉社から、マイクロフィルム版で刊行され、これと併せて文書の詳細な史料目録が作られた。筆者は、この北泉社版の目録作成に携わり、あわせてこれに解説論文と谷干城年譜を作成掲載した。

一方、谷干城関係史料のかなりの部分については、谷家にそのまま伝来し、現御当主谷元臣氏が所蔵しておられる。今回、その全容を調査すると共に、筆者が目録を作成した上、その目録をここに掲載させていただくこととなった。

筆者が谷干城関係文書の整理を行い目録を作成するに至つた経緯は以下の通りである。筆者が、谷干城について強い関心を持ったのは、年来の研究課題である貴族院研究の一環としてであつた。明治立憲政治上に

における貴族院の政治的役割を究明する上で、特異な存在として大きな地位を占めた谷干城を貴族院研究のキーパーソンと認識したからである。

さらに、一九九七年、高知市自由民権記念館の特別展「谷干城の見た明治」が開催される事となり、その史料調査と収集に協力する事となったが、その一貫として谷家を訪問した際、多数の谷干城関係史料の原史料を見いだしたのである。もともと、既に林英夫教授の主宰する朝日カルチャーセンターでの「古文書講読講座」において、谷家所蔵史料を講読のテキストとされ、その際、仮目録も作成されており、谷元臣氏は、それまでもさまざまな史料調査などには快く応ぜられていたので、ある程度はその存在は知られていた。

筆者は、前述の特別展以来、谷干城の人物研究のためにたびたび谷家を訪問させていただき貴重な史料を閲覧させていただいた。また、各史料所蔵機関において関係史料の収集を行った。こうして谷干城関係の史料を収集、検討する中で、谷は、貴族院のみならず、日本近代史研究上においても、明治政治史全体を解明するためのキーパーソンでもあると考えるに至り、その生涯の全般的な思想と活動を究明することを優先的な研究課題とした。そこで、現在迄の所、①「政治家としての谷干城」

(広瀬順昭・小林和幸編『谷干城関係文書』解説 北泉社、一九九五年刊)、②「長崎梅ヶ崎軍人遺骨処分事件と谷干城：政治家としての谷干城の誕生：」(『書陵部紀要』四七号、一九九六年三月)、③「谷干城における『立憲思想』とその実践」(高知市立自由民権記念館編『谷干城のみた明治展図録』、一九九七年)、④「谷干城における『民権』と『天

皇』(『駒沢史学』五四号、一九九九年七月)、⑤「谷干城の議会開設後に於ける対外観・外交論」(『駒沢史学』五七号、二〇〇一年三月)、⑥「明治初年の谷干城―谷干城における『輔弼』のかたち」(沼田哲編『明治天皇と政治家群像』吉川弘文館、二〇〇二年刊)、⑦『明治立憲政治と貴族院』(単著、吉川弘文館、二〇〇二年刊)、⑧「谷干城の慶応三年」(『駒沢史学』六四号、二〇〇五年二月)、⑨「初期貴族院における「対外硬派」について」(『駒沢大学文学部研究紀要』六二号、二〇〇四年三月)、⑩「明治二〇年谷干城提出「意見書」とその周辺―「王道論」の射程―」(『青山史学』二三号、二〇〇五年三月)、⑪「貴族院創設の理念と明治期の貴族院」(日本政治学会における口頭発表、二〇〇七年一〇月六日於明治学院大学)といった谷干城及びその関連論文を発表している。⁽¹⁾

このようにして今日に至るわけであるが、谷元臣氏は、貴重な史料を永く保存し、あわせて歴史研究に供することを望まれ、国立国会図書館憲政資料室に寄託することを決意された。そこで、あらためて目録作成を筆者が行うこととなったのである。

以下、本史料の概要について簡単に触れておきたい。

以下の目録で、明らかたとおり、谷元臣氏所蔵史料は、約七〇〇点余に及び、その殆どは、谷干城関係史料であり、干城の孫に当たる谷儀一関係書類及び谷家祖先史料若干も含まれる⁽²⁾(なお、谷家所蔵史料中には、谷乙猪の妻愛子宛書翰もあるが、その内容は、極プライベートなもので

あるため公開は見合せることとし、したがって本目録には掲載していない。このうち、谷干城関係史料は、繰り返すまでもなく近代史研究に重要な意味を持つものである。

まず、「谷干城関係史料」の概要であるが、書翰の年代による割合は、幕末期一割強、明治〇年代一割弱、明治一〇年代が多く四割近くを占め、明治二〇年代では一割五分程度、明治三〇年代以降一割程度となっている。幕末のものが比較的多数残されているのは注目し値するであろう。書類は、意見書その他、辞令・賞状、弔辞が多数残されており、谷干城の伝記的研究に資するところが大きい。以下、簡単に谷の経歴をたどりながら史料の概要を紹介しておきたい（なお、紙幅の関係もあるので、拙稿で紹介済みの史料は、それらに譲る）。

天保八年二月土佐国高岡郡窪川村に生まれた干城は、家祖である谷泰山以来の尊王思想を強く持っていたが、安井息軒の門下での江戸遊学中、桜田門外の変に遭遇して天下の形勢の容易ならざるを覚知し、学問に励む一方、時勢を注視することとなった。文久元年九月、帰国の途上大坂に於いて同藩の河野馬寿弥、池蔵太、武市半平太に会し時事を談じ、尊皇攘夷の主義を語る武市等に共鳴した。この文久年間、干城にとっても尊王攘夷運動に傾倒した時期であった。その実情は、干城が、父景井に宛てた書翰に見られる。例えば、文久（元）年七月一四日付書翰では、イギリスによる海岸測量を伝え、幕府の弱腰を憂えている（九六一―一〇一 文書番号、以下同じ）。また、同月二九日付書翰では、諸外国人の

跋扈や桜田門外事件関係者への同情を記し（九六一―二）ている。同様に、攘夷実行者への同情は、同年十一月二九日付書翰にも見える（九六一―三）。干城は、文久二年三月、文武館史学助教、さらに、大坂警護のため住吉陣詰を命ぜられたが、活動の幅が広がると、新しい政治体制を模索しようとする動向にも敏感となる。文久（二）年五月二九日付書翰（九六一―四）では、長州藩主毛利敬親と薩摩藩による幕府周旋に注目し、「諸侯一統会議之上正論に相従、諸侯同腹之上、尊王攘夷之思召之由」との趣旨とその構想を理解し、さらに、島津久光による「將軍御上洛、一橋公御後見、越前公御大老」の構想などを含め薩長の周旋について、「私心」のない「御正論」と評価するのであった。一方、土佐藩の動向については、吉田東洋暗殺後、一躍勤王派の勢力が優勢となるが、藩を挙げ

て尊王攘夷に向かうと期待した（文久（二）年六月三〇日付谷景井宛干城書翰、九六一―五）。その流れの中で、干城も八月藩邸接用に新任され、九月、九州探索、彦根探索などにあたった。しかし、一向に攘夷が実現しないことに、不満を持ち、山内容堂などの行動に期待と危惧をもっている様子が見え（文久（二）年九月七日付書翰、九六一―八・九）。さらに、江戸への往復、彦名探索などの活動により、文久二年末には、小目付役兼帯となり、容堂への意見具申など行った。この頃、谷が藩主豊範公に提出した建白書も、本関係文書の書類（一七七、一七八等）に見ることが出来る。翌文久三年、生麦事件による英国からの要求の報知を得ると、干城は、いよいよ外国との決戦の時と逸るのであった（文久三年二月三〇日書翰、九六一―一三）。同年の將軍上京には、攘夷決行の期

待を募らせるのであるが、暴論には与せずとの態度をとっている（同年三月一〇日付書翰、九六―14）。

ところが、文久三年四月、容堂の高知帰着後、藩内の情勢が変化し始める。攘夷派の優勢が動揺してくるのである（文久（三）年七月二五日付谷宛山川左一右衛門書翰、一五九―1）。また、京都に於けるいわゆる八・一八政変により、尊王攘夷派の勢力が一掃されると、高知でもその影響を受けることになった。その結果、藩内に公武合体派が有力になり、干城は次第に藩政から排斥される。元治元年五月より小目付役を免ぜられ高岡郡久礼浦の陣屋詰めに左遷され、約一年久礼村に留まる事となった。

その後、土佐藩内の情勢が混沌とする中で、慶応元年九月、高知に呼び返され、致道館助教を命ぜられた。ここに、慶応期に於ける干城の活動が始まる。慶応二年末、後藤象二郎の長崎貿易追求のため長崎探索を命じられたが、その際、後藤象二郎、坂本龍馬と面会し、また翌三年上海へ渡海して列強の実力を垣間見る事によって、攘夷の不可と、倒幕の必要を覚った。慶応三年三月一八日、小目付に任ぜられ、格式馬廻、役料二人扶持二四石を給せられ、四月四日には、上坂して薩摩藩の意向を探索すべしという命を受けた。さらに、五月二一日、中岡慎太郎の紹介により、乾退助と薩摩の小松帯刀、西郷吉之介、吉井幸輔らとの会見があり、干城、毛利恭助もこれに連なつた。討幕のための薩・土の連盟を談合、密約が結ばれたのであつた。この後、大政奉還から王政復古に向かうのだが、慶応期の土佐藩内の情勢を危惧しつつ、同志倒幕派との

連携行動を示す書翰も本関係文書には多いのだが、そうした史料は、既に拙稿⑧で紹介した。

戊辰戦争には、大軍監としてあたり、甲州、日光、さらに一端高知帰藩の後、白河や会津若松の激戦に加わつた。

明治新政府への本格的出仕は、土佐藩有力藩士のなかでは、しばし遅れた。それは、明治政府当初の政治運営に不満で、特に版籍奉還には、反対であつたからであり（明治二年六月二三日付谷景井宛干城書翰、九六―18）、近い将来に於ける薩長間の対立と争乱を予期して、土佐藩兵、藩財政の改革の必要を強く意識していたからであつた。しかし、からも政府統一は保たれ、廃藩置県へという運びになるが、そのための御親兵創設に際して、干城は、高知藩兵の精選を行い、明治四年四月兵部権大丞に任ぜられ、以後、陸軍軍人としての活躍が始まる。

陸軍軍人としては、台湾出兵時に於ける参軍としての出征、西南戦争時に於ける熊本鎮台司令長官としての籠城、奮戦はあまりにも有名であるが、その頃から、明治政府の施策に対する批判も見る事が出来る。それは、同郷の佐佐木高行などと連携するものであつた。干城は、民権派の行動について、権力奪取を目的とする不誠実な運動と目して批判する（明治一〇年一〇月二〇日付谷干城宛佐佐木高行書翰、五六―4）一方で、藩閥政府の専制的な施策、日本の伝統的な慣習や実情を考慮しない政治運営を批判した。その発露は、例えば、明治一三年から一四年にかけて問題化した長崎梅ヶ崎墓地改葬を巡る政府の対応への批判に見ることが出来る。この事件の詳細は、拙稿①、②に譲るが、これを契機に

干城は政治への関心を急速に高めることとなった。このように藩閥政府には、批判的であったが、明治天皇の信任は特に篤く、伊藤博文との関係も悪くなかった。明治一七年には学習院長、一八年には、内閣制度創設に際して初代の農商務大臣に任ぜられた。この頃までの明治初年の干城の行動についての詳細と、本関係文書所収史料については、拙稿⑥に譲る。

大臣就任の直後から、欧米視察に出発するのだが、帰国後、当時進められていた井上馨外相による条約改正に反対、農商務相を辞任するに至った。本関係文書には、この時、明治天皇に上奏したものなどの政府批判の意見書類も見出すことが出来る（一九二〜一九六）。干城の活動は、条約改正反対にのみ注目が集まっているが、その主眼とするところは、来るべき立憲国家としての日本のあり方を問うものであって、藩閥主導の政治を批判するものであった。すなわち、この時の干城の主張は、条約改正は、秘密主義を廃し議會開設をまち、議会の議決によつて行ふこと、新聞雜誌等の規則を寛め、言論自由を実現すること、郡区長等の民撰、官吏の減少と租税の軽減などであり、この頃には、天皇尊重の強い意志は維持しつつも、天皇の位置を政治の渦中から脱せしめ、民権派勢力とも共に政府批判を行わんとするものであった（拙稿④、⑩参照）。

干城は、帝國議會開設にあたり、貴族院の子爵議員に当選し、以後は、貴族院議員として政府に対峙する。この貴族院時代の干城の活動は、とりわけ重要である。貴族院では、政治会派「懇話会」を率いて活動し、日清戦争前の勤儉主義の主張や対外硬運動、言論自由の推進、日清戦後

の軍備拡張の風潮への強い批判、地租増徴をはじめとする増税反対、日英同盟ならびに日露戦争反対の言動は、当時としては極めて特異であつて、強い信念に発する政治活動であつた（貴族院での活動については、拙著⑦、拙稿⑤、⑨、⑪参照）。貴族院の存在意義が、党派的利害や政権の恣意から自由である「不羈独立」の言論にあるとするならば、貴族院時代の干城ほど、それに忠実であつたものは居ないであろう。

干城は、明治四四年五月一三日没した。干城の死には多くの弔辞が寄せられているが、丹誠を込めて尽力した足尾鉋毒事件被害地方青年総代からのものは、特に印象深い。ここでは、「明治三十年足尾銅山鉋毒事件ノ起リシトキ天下ノ名士多クハ銅臭ノ為メニ眩迷シ立ツテ我々ニ同情スルモノナカリシニ、当時総代彦三郎ハ弊衣破袴ノ一寒生ニシテ其門ヲ叩キ人民ノ苦楚ヲ訴ヘシニ將軍快ク引見ノ榮ヲ垂レテ其ノ事情ヲ聴取シ親ク被害地ニ赴キ実況ヲ査察シ直チニ被害民ヲ慰藉シ必ス一臂ノ力ヲ添ヘンコトヲ誓ワレ爾來議會及各所ニ於テ演說スル所アリ……」（三五二）と干城の功績を伝えている。干城は、国家を憂え、政府に厳しく対峙した。足尾鉋毒被害者救済や沖縄県人頭税廃止運動、零細な農民保護を目的とした地租増徴反対運動など見れば、その政治活動の基盤に、常に国民があつたことは明白である。その誠実と情愛は、記憶すべきである。

なお、付属の「谷儀一関係書類」についてであるが、谷儀一は、略歴③に明らかなとおり、干城の養子乙猪の長男として明治一四年八月に生まれた。日露戦争に従軍、近衛歩兵第二連隊同第三連隊などに属した後、

満州事変後、満州に派遣されている。儀一関係史料中には、日中戦争関係史料に加え、満州派遣時の写真が多数残されていて興味深い。また、干城に思想的に大きな影響を与えた、谷秦山、谷垣守の「谷家祖先史料」も本目録に収載している。

最後に、付言しておくべき点は、なお『谷干城遺稿』に収載された「洋行日記」や意見書など、立教大学所蔵分及び谷家所蔵史料にも、見あたらない史料も多数存在することである。これらは、疎開などに伴い谷家高知県西久万及び同県三谷にかつて所在した谷家別邸に保存された史料が、谷干城収集の刀剣なども含め戦後の家財処分に際し、あるいは、戦後の高知大震災に見舞われた折などに谷家を離れた可能性もあると考えられる（谷元臣氏談）。こうした史料については、さらに所在の調査が必要であろうと思われる。⁽⁴⁾なお、谷干城旧蔵書は、谷家から山内家に寄贈されたものがさらに高知県立図書館に寄贈されているほか、東京大学図書館や国立国会図書館にも漢籍などが収蔵されている。

注

(1) 拙稿を除いた谷干城の人物研究状況は以下の通りである。

谷干城の伝記には、浩瀚な平尾道雄『子爵谷干城伝』（富山房、昭和一〇年刊）がある。また、戦前には、『隈山谷干城之伝』（石原孫一郎、明治二〇年）、『国家干城谷干城詳伝』（渡辺義方編、明治二〇年）、『武人典型谷干城』（城南隠士、明治四四年）、『子爵谷干城先生伝』（寺石正路、昭和

五年）、『谷干城』（松沢卓郎、昭和一七年）などの伝記もある。

戦後の研究は、本山幸彦「谷干城の政治思想について」（『人文学報』六号、一九五六年）が、本格的谷研究の端緒であり、その後の主要な研究を挙げれば、坂野潤治、「日本主義」の外国観と日本観―谷干城の「洋行日記」を中心にして（『知の考古学』一九七五年三・四月号）、飯沼二郎「地租増否論争と田口卯吉・谷干城」（同『思想としての農業問題』所収、一九八一年）、福地惇「立憲政治と谷干城」（『谷干城の見た明治 図録』所収、平成九年）、岩井忠熊「谷干城覚書」（『立命館大学人文科学研究所紀要』七七号、二〇〇一年）などがある。なお、真辺将之「谷干城研究の現状と課題」（『土佐史談』二二〇号、一九九九年）はそれまでの谷干城研究を概観している。

(2)

今回、関係文書として収録した史料の中には、破損の著しいものもある。特に、劣化の状態から、本関係文書への掲載を見合わせざるをえなかった史料について、以下に、翻刻紹介しておく。

榎本武揚宛谷干城書翰案 明治（二四）年五月二一日付

今日ハ突然御訪問いたし候事、余之儀ニ非ス。即貴兄今般魯国行御拝命実ニ邦家之最大事、偏ニ御苦勞ニ奉存候故、疾より相伺可申心組ニ罷在候処、昨夜忽報アリ、魯国宮中より懇々タル御報アリテ、我宮殿下之御出発御断に付、御差止メニ相成タリト、野夫驚愕ニ不堪。抑も今度殿下ヲ被差遣諸臣中殊ニ貴兄ヲ御特撰ニて差立候事ハ、我レ之礼ヲ尽スモノニシテ、彼レ其之厚ギニ過るヲ謝スルモ又彼レ之礼ナリト雖モ已ニ御発表ニ相成候上、彼より謙讓シテ相断候トテ我れより向ノ面ヲ色ヲ見テ小廉ニ安シ云力俣ニ御差止と申ハ如何ニも輕薄ニ相見ヘ遺憾⁽⁵⁾□万ニ付、本日直ニ惣理大臣ヘハ愚見陳述致居申候。貴兄之御考ハ如何哉。若し御同感ニ□候ハ、是非共此之大□ヲ御勤被成候事ニ御尽力相願度。貴兄ニ於テモ西京之御評議ニ御同

案二て魯国之申来る俛ニ御差止メ可然と之御考ナレハ其理由拝聞いたし度心得にて参上いたし候。御用多之御中故御在宿如何と存候故、参上之理由ヲ認持参いたし候。差²置くへく御勘考相願候。勿々頓首

五月廿一日 干城

榎本雅兄机下

御留守を慮り認て持参せるものなり。

(3) 谷儀一的主要な経歴は以下の通りである。

明治一四年八月一日誕生、父は干城養子乙猪、母は愛子（村田経芳長女）。明治二二年七月一八日父乙猪没。明治三四年一二月士官候生として近衛歩兵第二連隊に入隊、明治三五年一二月陸軍士官学校入学、明治三六年一二月同卒業、同日見習士官。明治三七年二月近衛歩兵第二連隊附、歩兵少尉。明治三七年三月鎮南浦上陸日露戦役に従軍、以後、靉河・岫巖付近・分水嶺付近・様子嶺付近・不媽屯大溝高峰寺孟家房などで戦闘。明治三七年八月負傷して帰国、広島予備病院に収容された。明治三七年一二月近衛歩兵第二連隊充隊附、明治三八年六月歩兵中尉、明治三八年一二月近衛歩兵第二連隊附、明治三九年四月旭六等、明治四一年八月近衛歩兵第二連隊大隊副官、明治四四年五月三〇日子爵襲爵。明治四四年七月正五位、明治四五年六月近衛歩兵第二連隊附、大正一年九月三〇日近衛歩兵第二連隊中隊長、歩兵大尉。大正三年三月夫人サト（原忠順三女、明治二一年一月三日生）没、大正三年一二月曾我祐準の養女文子（明治二七年六月一日生）と婚姻。大正五年一月二一日近衛歩兵第二連隊副官、大正六年八月從四位、大正七年六月近衛歩兵第一旅団副官、大正九年八月近衛歩兵第三連隊附、歩兵少佐、大正一一年四月近衛歩兵第三連隊大隊長。大正一一年一二月陸軍歩兵学校に入校、翌年一月歩兵学校修学終了・退校とともに陸軍

谷家所蔵「谷干城関係文書」目録並びに解題

戸山学校に入校、同二月退校。大正一二年八月近衛歩兵第二旅団副官、大正一三年八月正四位、大正一三年八月本郷連隊区指令部部員、歩兵中佐、昭和二年一二月第一師団副官、昭和四年八月近衛師団司令部附拓殖大学服務を命ぜられ、歩兵大佐。昭和七年三月一一日拓殖大学服務を免せられ、歩兵第五連隊長。昭和七年三月歩兵第五連隊、満州事変勤務に従事を命ぜられる。昭和七年四月満州派遣のため青森港出發、昭和七年四月大連港上陸、関東州境通過綏中着同地鎮戍。以後、六股河河谷匪賊討伐、飲馬河馬蹄溝付近・陳宮溝付近・山海関付近・鐵路溝付近・大松木溝付近の戦闘に参加し、昭和八年三月承德付近・凌源付近の警備や新開岑付近の戦闘及密雲に向う追撃戦闘、懷柔付近戦闘、日密雲付近の警備、方吉連軍に対する戦闘に参加。昭和九年三月満州国功勞賞授与、昭和九年三月歩兵第三旅団長、少将となり、同年三月二三日釜山港出發、下関港帰着。昭和九年四月二九日旭三等、功四級・昭和六年乃至九年事変の功に依り金鵄勲章年金五百円及び旭日章を授与。昭和一〇年三月予備役。昭和一〇年一月貴族院議員（昭和二一年三月迄）。昭和二年七月八日没。

(4) その一部と思われる史料が、神奈川県立公文書館で、「田中兵五郎寄贈文書」として公開されている。

谷家所藏「谷干城關係文書」目錄

凡例

一、本目録は、谷家所蔵「谷干城関係文書」を整理した上、作成した目録である。併せて、谷家所蔵の「谷儀一関係書類」並びに「谷家祖先史料」についても、同様に収録した。

一、目録の編成は、書類、書類に大別し、書翰（電報も含む）については差出人の五十音順に配列し、書類については、内容や年代により適宜項目を立ててまとめた。なお、年代が原文書にないものは努めて考証し、（ ）を付して表記した。

一、書翰中「＊」を付したものは、連名書翰あるいは同封書翰を意味し、頭首に序数（アラビア数字）を付さず、該当書翰の所在は、【↓一六一一—一書翰】のごとく示した。

一、書類の標題は、原則として原題に拠ったが、編者が適宜表記したものもある。記述の順序は、標題、作成者、宛名、年月日、型式、数量である。内容、注記、添付書類などの説明は、次行に一字下げて掲げた。

一、この目録の編纂は、青山学院大学文学部教授小林和幸が、同大学文学部研究支援事務助手小野聡子の協力によって行った。なお、写真アルバムの整理などには、同大学大学院生、和田献太郎・河原正幸・千地将嗣が参加した。

書
翰
の
部

一 秋葉美雄 書翰

1 明治一六年 九月二九日 揮毫請願。 墨書 一通

二 浅野長勲 書翰

1 明治一五年 五月一五日 拙者近々赴任につき、上野精養軒午餐御来臨希望。 墨書 一通

有馬純臣 書翰

* 明治一七年 七月一七日 (牧野貞寧・佐竹義理・分部光謙・大久保忠順・山口弘達と連名) 【↓一六一—1書翰】

三 安藤照 書翰

1 明治 年 一月二九日 名古屋鎮台第三大隊長命ぜられ、出発。広島遊撃隊戦死者碑文の儀、藤田景徳より伺う。 墨書 一通

四 池尻茂四郎 書翰

1 文久(二年) 九月四日 同志の者、樋口胖四郎・内藤新吾等、御腹藏無く談論願う(注 干城、九州探索に際し)。 墨書 一通

五 一川研三 書翰

1 明治一六年 九月一四日 講義会元田先生差支につき延会。 墨書 一通
2 明治一七年 五月一七日 来廿四日、元田先生臨講、来局のこと。 墨書 一通
3 明治 年 六月一日 米花堂聴講会、元田先生不快につき延会。 墨書 一通
4 明治 年 七月七日 米花堂聴講会、元田先生未だ御全快無く、七・八月休会。 墨書 一通
5 明治 年 十一月一〇日 元田先生臨筵、定刻迄に米花堂へ御集会のこと。 墨書 一通

六 伊藤博文 書翰

1 明治(一七)年 六月一二日 御諭示の趣敬承、聖慮伺、奨励のこと。華族一統、唯今の体、不都合。授爵の制創設。華族の子弟教育の方嚮御示しのこと。 墨書 一通

七 乾和幹 書翰

- 2 明治（一七）年 七月 四日 御起草の学習院条令その他一読、叡覽に供す。 墨書 一通
- 3 明治（二二）年 五月 四日 憲法典範印刷贈呈。 墨書 一通
- 4 明治 年 四月 一四日 円山に雅筵御開、午後帰館の上参上。 墨書 一通
- 5 明治 年 七月 二一日 本日、小生遅刻遺憾、明日御参内願う。 墨書 一通

八 乾作七 書翰

- 1 明治 年 一二月 二二日 額面一葉揮毫願う。 墨書 一通
- 1 明治（三）年 一〇月 七日 病症如何。一兩日の内、御面談願う。 墨書 一通

九 井上勝之助 書翰

- 1 大正 八年 一一月 一五日 （谷儀一宛） 特旨を以て故谷重遠に正五位を贈らる旨、伝達。 宮内省野紙 墨書 一通

一〇 井上頼圀 書翰

- 1 明治 一七年 七月 一七日 天皇を帝と記す例。皇位と帝位は互通通書多く、不都合有るまじ。字面御選定 染筆願う。 墨書 一通

一一 岩倉具視 書翰

- 1 明治 一二年 九月 二八日 晚餐進上、御来臨願う。 墨書 一通

一二 岩崎弥太郎 書翰

- 1 明治 年 五月 九日 昨夜酩酊御海怒願う。牡丹開花、御令閨様同伴来駕願う。 墨書 一通
- 2 明治 年 八月 六日 龜品御令閨様へ御覽に入、近晩御閑話願う。 墨書 一通

一三 岩崎弥之助 書翰

- 1 明治 三六年 一月 三一日 日本鉄道入札一件大略記載、「時事」切抜拝呈。 墨書 一通

(付)「日本鉄道会社の入札問題」『時事新報』切抜 明治三十六年一月三十一日号) 活版 一枚

2 明治(三六)年 二月 六日 日本鉄道会、メール新聞に対する答弁不充分。 墨書 一通

一四 巖谷修 書翰

1 明治(一七)年 七月 一八日 (荻野重省持参) 荻野重省学習院習字教師に御試用願う。「童子習」一卷奉還。 墨書 一通

2 明治一七年 七月 一九日 (重野安繹と連名) 荻野某、学習院習字教師採用願う。 墨書 一通

一五 岩邨英俊 書翰

1 明治一三年 八月 二五日 清閑より依頼の序文清書拝読。廿六日会議差延ぶ。 墨書 一通

王韜 書翰

* 明治一二年 六月 日 (吉田次郎宛、谷干城宛吉田次郎書翰に同封)【↓一六八―2書翰】

一六 大石圓 書翰

1 明治 年 一〇月 一〇日 富永有隣御仁免、御尽力願う。 墨書 一通

2 明治 年 一一月 一六日 下戸超量御容赦願う。閣下自ら書きたまえる御改革十八条搜索見出次第、差出す。 墨書 一通

一七 大貝直太郎 書翰

1 明治 年 九月 一六日 僉品献ず。 墨書 一通

大久保忠順 書翰

* 明治一七年 七月 一七日 (牧野貞寧・佐竹義理・分部光謙・山口弘達・有馬純臣と連名)【↓一六一―1書翰】

一八 大久保利通 書翰

一九 大隈重信 書翰

1 明治 年 十一月 一日 晩餐進上、御入来願う。 墨書 一通

1 明治 三四年 一月 一七日 觀菊基将棋会相催、御高話拝聴仕りたし。目下新築工事中不行届、御諒察願う。 墨書 一通

二〇 大越亨 書翰

1 明治 一三年 九月 六日 安井息軒墓碑建立釀金のこと。 墨書 一通

二二 大谷光尊 書翰

1 明治 二六年 一月 五日 賀状。 活版 一通

二三 大山巖 書翰

1 明治 (一二) 年 四月 二六日 十年役負傷士官別府信夫、士官学校採用目途なし。 墨書 一通

二三 小笠原唯八 書翰

1 慶応 三年 一〇月 五日 (谷干城・毛利恭助宛) 天下の形勢如何、坂龍芸船に乘来、薩長芸義拳の趣、退助大隊指令官として京師差立の趣、龍馬一言のみにて京師よりの確説なし。【『谷干城遺稿』上巻、四六頁に掲載】 墨書 一通

2 慶応 三年 一〇月 五日 (野本平吉宛) 胡蝶船回送、乾の話、近々二大隊出兵。京師の発卒、土州勢出京まで差控のこと薩藩御談じ方懇願。 墨書 一通

3 慶応 三年 十一月 二日 大条理建白、朝幕採用恐悦。僕大目付在官十二日にて免官、退助も免官。大榎論尤も高し。御上京の風聞承知。弟謙吉御取計願う。【『谷干城遺稿』上巻、四九頁に掲載】 墨書 一通

二四 沖本忠三郎 書翰

1 明治 一七年 五月 二〇日 桑原平八同行参堂のこと何う。 墨書 一通

2 明治 年 七月 二五日 本県(注 大分県)改進黨末流衰色、国体を重んずる有志私塾開設。熊本済済

鬢差遣の吉武恵四郎士官学校志願、佐々友房も愛育、将来の方向御示し願う。

墨書 一通

二五 香川敬三 書翰

- 1 明治一七年 七月一八日 副島種臣以下五名華族に列す。宮内省野紙 墨書 一通（二枚）
2 明治一七年 十一月二三日 （谷玖満子宛）皇后宮、参内御召。 墨書 一通

二六 学習院 書翰

- 1 明治二五年 九月七日 （葉書）谷儀一、和様画、望あらば申出べきこと。 墨書 一通

二七 桂太郎 書翰

- 1 明治（四二）年 三月二日 富岡男へ祭資料下賜、在官中特別の功勞あり、充分尽力。 墨書 一通

二八 金井之恭 書翰

- 1 明治 年 九月二六日 手塚光榮長男、手塚不二夫学習院入学志願。 墨書 一通

二九 嘉納治五郎 書翰

- 1 明治（二〇）年 七月一日 学習院進級証書授与式御臨席、生徒へ御話願う。 墨書 一通
2 明治（三〇）年 七月一六日 海南学校首席教員大嶋英助に内定。川田氏は未だ適當なる口なし。 墨書 一通

三〇 樺山資紀 書翰

- 1 明治一〇年 八月一日 別働第一旅団繰込。台下警備など戦況報告、賑恤金物議少し。横井党奔走、東京警視出張所引揚げ、一層御注意。近々卒業の新兵編入如何。『谷干城遺稿』下巻、四七五頁以下に掲載】熊本鎮台野紙 墨書 一綴（三枚）
2 明治（一〇）年 十一月一七日 野砲隊新營へ転移。大隊長採用取調願う。塩谷軍吏補上京の儀伺。犯罪未決等功罪相償御処分なりたし、宮崎大主理上京、御指揮願う。 墨書 一通
3 明治一〇年 十一月二三日 高瀬四郎辞任のこと。叙勲不平均、別紙人別叙勲のこと、鎮台会議如何。足創破傷温泉療養承諾願う。目下の急務、死傷者第一順序立つべし。 墨書 一通

(付) 叙勲人別表 陸軍省野紙 墨書 一枚

4 明治一一年 四月三〇日 山砲隊編成改正、士官繰替。 墨書 一通

5 明治(一一)年 七月十三日 御旧県様子如何、御旧県安岡某等、当県士族等動向。当台集会所所有終社開社、諸隊奨励のため等級をたて賞品を賜与。 墨書 一通

(付) 陸軍省内熊本鎮台旧征討事務所送付書 谷干城宛 七月二三日付 墨書 一枚

6 明治一一年 七月二七日 (電報) 指揮を待つ。 墨書 一通

7 明治(一二)年 二月二六日 築地へ御足労願うも、近衛諸隊行軍のため遅刻御断。 墨書 一通

三一 川口常文 書翰

1 明治一七年 一月二九日 結城神社造営。染筆願う。 墨書 一通

三二 川尻宝岑 書翰

1 明治(一七)年 九月七日 拙著『文明論』呈上。連名へ御届願う。 墨書 一通

三三 川田剛 書翰

1 明治(一七)年 九月一五日 中山克己、学習院英書教員御採用願う。 墨書 一通

三四 菊村徳 書翰

1 明治一七年 七月三日 学習院長就任謹祝。世上道德に薄く營利に厚、慨嘆。御栄転毛利翁も奉賀。 墨書 一通

三五 城多董 書翰

1 明治 年 八月五日 西京著名の富商杉浦、心学復興、昭倫舎の講話組織維持、西京の様子御聞取願う。 墨書 一通

三六 北村重頼 書翰

1 明治 年 一二月五日 乙猪君御光来奉謝。別紙佐佐木高行申来、御都合御伺。 墨書 一通

(付) 佐佐木高行書翰 北村重頼宛 一二月五日付 明日参上の心得。谷氏
へ通知願う。墨書 一通

三七 北村まつ 書翰

1 明治一七年一〇月三〇日
(封筒の差出人は北村勝弥) 御懇命御礼。公債証書名前替出願中。楠弥太身上
の御忠告願う。墨書 一通

三八 久徳宗義 書翰

1 明治 年 二月二十四日
正服用御来会願う。墨書 一通

三九 行田吉又 書翰

1 明治 元年 五月四日
高橋良識、御国へ差返の病人附添仰付けらる。墨書 一通

四〇 陸実 書翰

1 明治(二五)年 一二月二五日
千島探検赴きし国家経済会員笹森儀助紹介。墨書 一通

四一 宮内省華族局 書翰

1 明治一七年 七月二十四日
華族諸届の内、別戸届・戸籍面正誤届、当省へ願出べき事。墨書 一通

2 明治一九年 一一月一日
爵記授与、出局すべし。仮爵記持参のこと。宮内省野紙 墨書 一通
(付) 華族局庶務課通知 谷干城宛 明治一九年 一一月一日付 爵記授
与、代人は華族中の者を差出べきこと。墨書 一枚

国沢大八郎 書翰

* 明治 一二年 五月一日
(宮地貞香・村山素行と連名) 【↓一四六―1書翰】

四二 国沢諒吉 書翰

1 明治 二二年 八月三日
(谷玖満子宛) 服地、注文のこと。墨書 一通

四三 久保田精一 書翰

1 明治 一二年 七月 一日 安井息軒碑銘の儀盛会の旨拝承。平臥遺憾ながら不参。 墨書 一通

四四 隈岡長道 書翰

1 明治 年 六月 五日 中佐昇任丸亀転任、餽酒呈したく案内。 墨書 一通

四五 熊本鎮台 書翰

1 明治 一一年 七月 一八日 (電報) 兵士、勲功につき沸騰の諸新聞記載、全く虚説。 墨書 一通 (二枚)

四六 久米篤太郎 書翰

1 明治 年 月 日 漢詩「香山温泉」奉呈。 墨書 一通

四七 黒田宗二郎 書翰

1 明治 一六年 九月 一四日 史学協会入会願。 墨書 一通

四八 黒田長成 書翰

1 明治 三六年 一月 一三日 羽根田鴨胤案内。 墨書 一通

四九 幸田成延 書翰

1 明治 二六年 一月 四日 (谷儀一宛) 御祖父様御厚情深謝。アイヌ熊打ちの始末申上ぐ。 墨書 一通

(付) 目録 浅原唯次・幸田成延 谷儀一宛 明治二六年一〇月二五日付 金五円報效義会拝受。 墨書 一枚

五〇 神山郡廉 書翰

1 明治 年 一月 二〇日 玉川茶亭、同郷人少集茶話会臨席願う。 墨書 一通

五一 近衛篤磨 書翰

1 明治 (三三) 年 一二月 一三日 唐津女丈夫奥村五百子紹介、朝鮮において種々経営、この度支那行、面謁願う。 墨書 一通

2 明治(三五)年 四月 一三日
南京陸軍士官学校校長俞明震面談願う。同氏は劉坤一腹心、将来有望。 墨書一通

3 明治 三六年 五月 七日
病氣見舞、平癒につき御礼。 墨書 一通

五二 小松宮彰仁 書翰

1 明治 二〇年 二月 二八日
(電報) ローマからフイレンツェの谷へ) 病氣見舞。 一通

五三 小山正武 書翰

1 明治 一一年 一〇月 二二日
招魂祭典費の儀御問合の廉、別冊御落掌願う。別冊答書 西南の役戦没者招魂祭典金本払仕訳書。高知県野紙 墨書 一綴

(付) 寄付金のこと 墨書 一枚

五四 近藤新 書翰

1 明治 年 五月 二二日
上京陳情、百做商社資金不足。県庁人事不公正、前野他二名の失策、賄賂云々、同志困窮。 墨書 一通

五五 佐佐木高美 書翰

1 明治 年 一二月 二五日
山地家世襲財産差出につき調印願。 墨書 一通

五六 佐佐木高行 書翰

1 明治 (二)年 六月 九日
後藤執政、板垣執政と示談。一度出仕なくば甚だ不具合。委曲情実申上たし。 墨書 一通

2 明治 七年 二月 一四日
佐賀県沸騰、御配慮と存ず。東京は岩倉事件以来取締り、行届く。井上毅御出会の上東京の光景御聞取り願う。古庄嘉門禁固中のところ赦免、兵士へ登用如何。 墨書 一通

3 明治(一〇)年 八月 二八日
賊徒逃去大慶。県内情勢、中立社其人に乏し、財用も同断、大困却。立志社着手以来挫け察せらるも、大先生奮発、財用もあり、目的相立光景。『谷干城遺稿』下巻、四八〇頁に掲載 墨書 一通

4 明治 一〇年 一〇月 二〇日
西南の役平定、雅兄勲功は皇国の幸福、吾県の名譽。県地、立志社演説・雑誌、

政府の施行を誹謗、偽民権を以て真民権の仮面を蒙る。中立社の号を廃し学校に致すは如何。墨書 一通

5 明治(一四)年 十一月 一日
山田信道赴任につき番町米華堂にて安場・山田・鎌田・中村・土方と小集、案内。墨書 一通

6 明治(一五)年 二月 二七日
土方来り、件のところにて二千五百は調う趣、箱崎(注 山内家)に願ひ、千円四人連借、御考え如何。墨書 一通

7 明治(一五)年 三月 一日
別紙土方の書翰呈す。墨書 一通

(付) 土方久元書翰 佐佐木高行宛 三月一日付 箱崎へ申入、新紙のことは毫も申さず、只国事の儀に付き入用致す方しかるべし。墨書 一通

8 明治(一七)年 一〇月 一八日
芝の伊勢源へ転席報知。墨書 一通

* 明治 年 一二月 五日
(北村重頼宛、谷干城宛北村重頼書翰に同封)【↓三六―1書翰】

佐竹義理 書翰

* 明治 一七年 七月 一七日
(牧野貞寧・山口弘達・分部光謙・大久保忠順・有馬純臣と連名)【↓一六一―1書翰】

五七 佐々友房 書翰

1 明治 年 五月 一七日
安達謙蔵紹介、戦記序文願う。墨書 一通

2 明治 年 月 二六日
ストッフエル大佐の談話筆記御一読願う。墨書 一通

五八 三条実美 書翰

1 明治 一八年 四月 一四日
園会御来車希望。墨書 一通

五九 三条家家扶 書翰

1 明治 年 六月 一六日
今朝差支の義につき、明十七日または明後日参邸を願う。墨書 一通

六〇 参謀本部会計部 書翰

六一 参謀本部 書翰
1 明治一七年 七月二日 独逸軍政全書代価送金願う。 参謀本部野紙 墨書 一通

1 明治 年一〇月三〇日 戦理実学戦闘術進呈。 墨書 一通

六二 史学協会幹事 書翰
1 明治 年 六月 七日 史学協会編纂委員茶酒の小宴臨席願う。 内藤恥叟迄御答願う。 墨書 一通

重野安繹 書翰
* 明治一七年 七月一九日 (巖谷修と連名) 【↓一四—2書翰】

六三 洪沢栄一 書翰
1 明治二八年 一二月一五日 辻君と共に伊藤総理に面会。 兩人希望の如く運び兼ね遺憾。 委細は辻君より申上べし。 墨書 一通

六四 斯文学会 書翰
1 明治 年 五月 五日 例会開催の通知。 墨書 一通

六五 島義之 書翰
1 明治(一七)年 六月一日 御枉駕御礼。 墨書 一通

六六 島村勇 書翰
1 明治 年 六月一七日 山崎資紀遺妻御処置につき、復籍書類、連署捺印の御下命を願う。 墨書 一通

六七 島村干雄 書翰
1 明治(一二)年 一月三日 熊本より昇任祝詞、官宅留守居、御乗馬取扱如何。 墨書 一通
2 明治(一七)年 五月五日 (上海より) 御依託の書籍中通鑑明紀送付。 墨書 一通

3 明治一七年 八月二三日 (消印、封筒のみ、香港より) 墨書 一点
4 明治一八年 六月九日 雜報第五七号写。「清仏の和議幾と成る」、「東京及び台湾等の景況」報告。清
仏和議意外時日遷延。 墨書 一綴

六八 島村正治 書翰
1 明治 年 五月二五日 愚弟養育御礼、御指使願う。 墨書 一通

六九 島村安度 書翰
1 明治一五年 四月一五日 片岡直温を以て愚姪堀田安一を邸内に置くの願、御許容、本懐の至り。 墨書
一通

七〇 島村秀雄 書翰
1 明治三二年 一月一日 (谷儀一・守人宛) 賀状。 墨書 一通

七一 下田歌子 書翰
1 明治(二七)年 七月六日 日清の事件、支那の形勢。英国の狡猾。当英国兼務の公使、条約改正に大功を
得んと欲し、彼に膝を屈し政事上の秘密を漏らす。女子教育は欧州列国の基礎
を換骨脱体して我が国に実施すべし。 墨書 一通(五枚)

七二 修道館 書翰
1 明治一七年 七月七日 資治通鑑送金未済社員催促、既済社員通鑑送送遅延を謝す。 活版 一通(二
枚)

七三 賞勲局 書翰
1 明治一〇年 一二月一七日 御用有り参局のこと。 墨書 一通

七四 女子学習院 書翰
1 明治 年 六月一四日 (谷家執事宛) 写真拝借複写済につき返却。 墨書 一通

七五 白井洌 書翰

1 明治 年 十一月 十三日 今般、東次郎領事に従い支那へ参る、御世話感謝。漢詩差上ぐ。 墨書 一通

七六 末広重恭 書翰

1 明治 一七年 一月 二二日 兼ねてお願いの文章頂戴致したし。 墨書 一通

七七 杉孫七郎 書翰

1 明治 年 六月 一四日 過日差出の油絵屏風、天覧御献上の事に相運ぶ。 墨書 一通

七八 諏訪重中 書翰

1 明治 年 六月 六日 乗用馬匹御入用につき、土屋に伝言、購求・借用判然せず、如何。 墨書 一通
2 明治 年 六月 二二日 墨水行につき都合伺。 墨書 一通

七九 正院 書翰

1 明治 年 七月 九日 御用有り、正院参官のこと。 墨書 一通

八〇 専崎弥五平 書翰

1 明治 一七年 七月 三〇日 暑中御伺。 墨書 一通

八一 副島種臣 書翰

1 明治 二八年 一月 一日 (消印、封筒のみ) 墨書 一点

八二 曾我祐準 書翰

1 明治 (一二) 年 七月 四日 京地は御多用と察す、近県悪病頻りに流行。山脇大尉の義、情実尤も、転任差支なし、失策の一件先月決着、代人のこと。 墨書 一通
2 明治 一六年 一〇 月 二〇日 (曾我祐準執事書翰、谷干城執事宛) 御主人様帰京次第報知願う。 墨書 一通
3 明治 一七年 七月 一日 偕行社にて安南より帰朝の士官演説に御臨席願う。三浦よりの一書到来、御一

読の上御廻し願う。 墨書 一通

4 明治一七年一月九日

風斗名刀の一条、別紙の通、実物の所在相判る。 墨書 一通

5 明治一九年一月三十一日

(付) 十時(立花家家扶)書翰 曾我祐準宛 明治一七年一月七日付 風斗氏名刀立花家に相納。 墨書 一通

ウイーンからの尊書拝読、各国兵事御見聞の次第、月曜会と称する将校集会の席にて朗読、一座感慨。小生、議論を起こし終局閑散に身を置く。昨冬一変事より兵事上也旧来の弊事を一洗し、真の拡張と喜び居る処、今日の形勢にては覚束なし。長崎の支那軍艦兵乱暴の一条も今日まで終局の模様なし。 墨書一通

6 明治(二九)年一月三〇日

広島にて三浦氏へ差入物の代価、御届願う。 墨書 一通

7 明治 年二月九日

助興の品年少に過ぎ風情なし。右の計算不日申上べし、昨冬の分、三浦に申入、分頭税に従い申すべし。 墨書 一通

8 明治 年十二月一日

約束の別表四葉差出す。 墨書 一通

八三 袖山益衛 書翰

1 明治一七年一月二〇日

懇願の件、御憐恤なしくだされまし。 墨書 一通

八四 高嶋義恭 書翰

1 明治一七年六月四日

先生には学習院長御拝命、邦家のため恭賀。 墨書 一通

八五 竹内正策 書翰

1 明治一七年六月二三日

赤坂公園地内某亭へ豊尹様加入、担任者へ御照会願う。 墨書 一通

2 明治(二七)年六月二八日

豊尹様、赤坂公園茶亭へ御出なられたきこと、御照会の儀、未だ先方の応諾なし、明日の処は他所へ誘導。 墨書 一通

3 明治 年十一月二十九日

豊尹様、修学上の儀につき弘田貫次郎と共に伺いたし。 墨書 一通

八六 太政官書記官 書翰

1 明治一二年九月一九日

御用、参官あるべし。 印刷 一通

八七 伊達宗城 書翰

1 明治一七年 九月 六日 枕橋八百松楼へ御招、昇堂申入れ。 墨書 一通

八八 田中綱常 書翰

1 明治(一二)年 三月 二日 熊本城戦没者奥山政守の扶助の儀、再三出願、未だ沙汰なし。 墨書 一通

八九 田中光顕 書翰

1 明治三七年 四月 一日 先日の件首相へ面晤の結果不十分、遺憾。坂本龍馬云々は事実、不可思議の次第(注 皇后陛下御霊之事)。 墨書 一通
(付)「国母陛下の御瑞夢」(『東京日日新聞』切抜) 活版 一枚

九〇 田辺輝実 書翰

1 明治(一五)年 三月 一七日 (谷干城・佐佐木高行宛) 当県士族横田正綱、当県八等属、県務は長ぜざる者、何辺か採用願う。 墨書 一通

九一 田辺良顕 書翰

1 明治 年 七月 八日 両国亀清楼に御来車願う。 揮毫願う。 墨書 一通

九二 谷乙猪 書翰

1 明治一〇年 七月 三〇日 (谷玖満子宛) 江ノ島着、安心願う。今朝大砲の音しきり、九州の模様如何、御知らせ願う。 墨書 一通

2 明治一七年 八月 三〇日 (封筒のみ) 墨書 一点
3 明治二〇年 七月 二七日 御辞表御聞届の趣、皇室のために惜しみ、父上様将来のために賀す。御意見書敬服。 墨書 一通

九三 谷景井(万七) 書翰

* 文久(二)年 (九)月 日
1 文久(三)年 一月 一四日

(断簡) 【九六一書翰】

容堂様今度の御働天下評判。内は存外、老翁心痛。太守様御帰国遊ばされ兵備御手配のこと、策略認む。諸事連絡。 墨書 一通

九四 谷玖満子 書翰

1 明治 一九年 一〇月 二二日

（谷芳子と連名）下田歌子より御手紙参る。先日御手紙の委細下田さんに話す、御よろこび。制服は舶来では御国のためにならぬ。御申越の通り日本は日本で出来るもので作るよう歌子殿も心配。芳子、乙猪近況。墨書 一通

2 明治 一九年 十一月 一八日

（谷芳子と連名）豊景様、芳子、儀一、守人のこと、御申越の通り日本は日本の物で用いるべし。墨書 一通

3 明治 二七年 八月 一二日

（谷儀一宛）東宮殿下還御のため新橋停車場へ奉迎すべき旨通知あり、十三日には帰京のこと。墨書 一通

九五 谷重喜 書翰

1 明治（六）年 二月 二〇日

徴兵使出発、募兵法手初に相なり、近衛兵都合よろしく解隊、御安神ならるべし。脱走困り居り、乙猪無事、坂井重季身前の儀、御配慮承知、好場所ありや。墨書 一通

九六 谷干城 書翰

1 文久（元）年 七月 一四日

（谷景井宛）英夷海岸測量も既に発に相なる趣。八月末か九月初め帰国。墨書 一通

2 文久（元）年 七月 二九日

（谷景井宛）早魃の由心配、蕃夷跋扈、桜田一件水戸共死罪、金子は屈指の人、大事中第一の人物。墨書 一通

3 文久（元）年 十一月 二九日

（谷景井宛）諸品高値、一揆起るも最至極。水戸浪人亡命諸方急、廿一日金川夷館数百人切入の風説。国沢七郎右衛門次女私妻に御相談、承知。墨書 一通

4 文久（二）年 五月 二九日

（谷景井宛）大膳大夫（注 毛利敬親）御周旋之儀、諸侯一統会議の上正論に従い、諸侯同腹の上、尊王攘夷の思召の由。大坂、京師共に騒しく、長薩の思召、暴発差控を諭す。浪人ども、伏見町屋にて切合。島津様勅使御守護御下向、將軍御上洛、橋公御後見、越前公御大老のこと。長薩思召は御正論。墨書 一通

5 文久（二）年 六月 三〇日

（谷景井宛）この頃、私儀、御雇勤五人扶持二拾石下しおかる。御當若手皆はしか。この度豊臣太閤の古典にならい大諸侯の内を以て五大老をおく風説。こ

の度の御上り、御当家万代の御名譽。御役人断然勤王の一議、吉田元吉一人を刺し正道に向、長薩の志士も雀躍。 墨書 一通

6 文久（二）年 八月 一日
（谷景井宛） 太守様は大坂迄御首尾よく御着、流行麻疹烈しく御供多人数病、未だ御発駕も相ならず。私彼地にて時勢探索仰せつけらる。この度関東御承服に見えるも陰に姦物、不安。千種・岩倉・富小路の三人頗る姦物。島田・永野主膳三条河原へ梟首。 墨書 一通

7 文久（二）年 八月 一六日
（谷景井宛） 太守様大坂御着否御麻疹、久しく大坂に御滞坐。長薩よりわるくちも申かに承る。備前因州石州濱田などは三国申合上京、実に盛なる事。漸く来廿二日大坂御発駕と申事。 墨書 一通

8 文久（二）年 九月 七日
（谷景井宛） 関東も段々御模様かわりに相なり、諸侯の参勤交代等も御差弛、富国強兵の御策となる。攘夷の儀一向御沙汰なし、容堂様天朝より御呼立、一昨日勅命御下け。私先日以來西国筋探索御用。身命を抛ち皇国の御為に尽力。 墨書 一通

9 文久（二）年 九月 七日
（谷景井宛、追書） 当時京都を御見捨あそばされ、関東へ御下りは御当家御滅亡。容堂様にも幕府御改革に御預りあそばさる思食の処も幕府御用に相なり、きつと天朝の御為に相なる様御周旋あそばさる由。 墨書 一通

10 文久（二）年 九月 一三日
（谷景井宛） 九州行。この度は樋口真吉と随勤。天朝の御勢は随分御盛、一段恐悦。天下の勢不穩。 墨書 一通

11 文久（二）年（九）月 日
（谷景井宛） 去廿一日関東より帰る。当分小目付役兼帯仰せつけらる。容堂様へも両度御目通、愚存をも言上、且又、御上の思食をも拝承。品川御殿山夷人館、去十二日夜焼滅、不日彼等も兵艦を差向の事、疑あるまじ。 墨書 一通

12 文久（二）年（一二）月 日
（谷景井宛） 去年島津三郎、生麦にて英国人殺害、この度三ヶ条の難問。幕府よりも諸侯方へ御触達、各自国を固める様命令。先愉快なる勢。きつと守備なくてはならず。 墨書 一通

13 文久 三年 二月 三〇日
（谷景井宛） 將軍、四日御着京、明十一日加茂の神社へ幸。誠に希代の御盛事、攘夷の期限、御定、何も格別に憂うべき事もなし。この上は御隠居様にも早々御帰国、海防御手当御急務。私、暴論の者には同意せず。 墨書 一通

14 文久 三年 三月 一〇日

- 15 慶応三年三月八日
 (書翰案、横田祐造宛) 悦次郎病氣、万事一身へ世間の風評甚悪しく、薩長により皇威を張るべし、幕府討つべし。 墨書 一通
- 16 慶応三年一〇月一四日
 (書翰案、野本平吉宛力) 西郷吉之助、後藤等会合につき、御一席、御聞取なられたし。 墨書 一通
- 17 幕末 年 三月一四日
 (中村禎輔と連名、寺村左膳・乾退助宛) 銅山のこと、阿州公へ使者帰着後、御書御渡しのこと。 墨書 一通
- 18 明治二年六月二三日
 (谷景井宛) 当地、万事綱紀張らず、嘆息。この度郡県の御沙汰、御失策、馬鹿者集まり朝政をつつきこわす。早々に帰国仕りたし。兵隊用いず帰国、気の毒。 墨書 一通
- 19 明治(七)年七月二五日
 (谷玖満子宛) この度、再び台湾出發、乙猪黒川さんに頼み置き、梅めしつかわれたし。 墨書 一通
- 20 明治一年九月一日
 (谷乙猪宛) 演舌会の暴論も大分相止む様子。彼の愛国社と称し大坂へ出張し各県の論客を集台等の事は勢止み難き様子。只致方なき者は旧郭中の御馬廻達、実に因循姑息、歎息にたえず。 墨書 一通
- 21 明治一四年一〇月 日
 (書翰案、宛先不明) 高知武官親睦会、見舞金送付。 墨書 一通
- 22 明治一五年三月八日
 (同書、大山巖宛) 糸賀虎次郎少尉戦闘日誌編纂、勉勵賜金下賜伺。 墨書 一通
- 23 明治(一七)年(七)月(一八)日
 (書翰案、伊藤博文宛) 木村弦雄学習院幹事給与、木村幹事仰せつけは見合わせたし。 墨書 一通
- 24 明治(二〇)年(七)月 日
 (書翰案、伊藤博文宛) 人民休養、条約改正現政府反対、辞職決意。 墨書 一通
- 25 明治(二二)年九月一四日
 (書翰案、浅野長勲宛) 学習院囑託云々、辞退。現今、政治社会沈滞。東京電報発起の某氏説を変え言を構える。証人の地位にあること故助力す。辻・野村と相談の上助力願う。 墨書 一通
- 26 明治(二二)年(二)月(二三)日
 (書翰案、元田永孚宛) 探偵云々、実に干城が一身は大なる獄中に在るもの、歎息の外なし。行政官の失策を責むるは臣子の皇室に対する本分。曖昧に板垣・後藤輩と合同する事は決て致さず。彼れ若し旧説を捨て干城が説に同じ、上皇室に尽し奉り、下公衆の益を計るにおいては敢て忌まざること。『谷干城遺稿』上巻、六八四頁以下に掲載】 墨書 一通

(注) 後筆朱書で「佐々木(高行)氏ニ贈ル手紙之草案ナルカ如シ」とあるのは誤り。

27 明治二二年 八月一四日
(書翰控、黒田清隆宛) 条約改正の事、已に憲法に背戾の誤あり。「不安心ト思フ條件ノ概略」書上。『谷干城遺稿』下巻、五三六頁以下に掲載】墨書一通

28 明治(二四)年 一月二六日
(書翰案、山県有朋宛) 商法廃案の議決前、村田保に御助勢の内話ありや。墨書一通

29 明治二四年 一月二六日
(書翰案、陸奥宗光宛) 度量衡法案第九条改正につき村田氏に御頼談ありや。墨書一通

30 明治二六年 四月一三日
(谷玖満子宛) 京都花見参られたし。墨書一通

31 明治二六年 八月三日
(谷玖満子宛) 北海道視察のこと、別紙甲州の断金隊士族編入願書、実印押されたし。墨書一通

32 明治二六年 八月七日
(谷玖満子宛) 北海道視察日程。墨書一通

33 明治二六年 八月八日
(書翰案、澤村則辰宛) 澤村則辰君男子を挙げ、余、澤村駿甫と命名す。墨書一通

34 明治二七年 八月三日
(谷愛子宛) 玖満子等高知出発、陸路にて五日帰京。墨書一通

35 明治二七年 八月六日
(谷愛子宛) 玖満子等神戸、名古屋に滞在、八日帰京。墨書一通

36 明治三四年 八月三日
(書翰案、長屋重名宛) 丹三郎・丹内の尺牘、真蹟に相違なし。丹三郎略歴。墨書一通

37 明治(三六)年 八月三〇日
(谷儀一宛) 日露非戦論。伊藤侯の対露策は至極穩当、大学七博士の徒、全く青書生論、侵略の主義持兇器強盜。日本外交憐れ至極、兵は危道なり、戦いは凶事なり。伊藤、山県の自重あり、桂、小村小才子、何事もなし能わず。馬鹿氣違の予防のため短銃は、始終所持。国家のため、皇上のためと確信する以上は自己の説変ずる能わず。『谷干城遺稿』下巻、二五八頁以下に掲載】墨書一通

38 明治三七年 五月二二日
(谷儀一宛) 鴨緑江大戦、堅塁撃破、邦家のため大幸。十分用心肝要。遼陽の黒鳩獅も遠からざる事。軍刀送付。玖満子、報国婦人会を発起。墨書一通
(付) 谷干城追書 明治三七年五月二二日付 只今御手紙達す。前途なお遼

陽の大戦あり、気長く奮発のこと。 墨書 一通

39 明治 四〇 年 一 月 六 日
（谷玖満子・谷芳子宛）道中無事。当地御邸も殿下待ち受けの準備調う。明日より須崎にて殿下お迎え。 墨書 一通

40 明治 年 六 月 六 日
（谷玖満子宛）神戸より高知へ無事到着、海南学校生徒出迎え、儀一容体如何。 墨書 一通

41 明治 年 一〇 月 一 八 日
（書翰案、伊月一郎宛）海南学校へ洋書御投惠感謝。 墨書 一通
42 明治 年 月 日
（書翰案、琴仙謝宛）本月九日開帆、勿々如此遺憾。 墨書 一通

九七 谷好水 書翰

1 明治 一 二 年 四 月 一 六 日
御帰県中、御世話御礼。諒吉君より家作金蔵等の義委細御聞取り願う。 墨書 一通

九八 淡中新作 書翰

1 明治 一 七 年 五 月 三 日
森忠太郎の儀よろしく願う。 墨書 一通

九九 東京地学協会 書翰

1 明治 一 七 年 五 月 二 三 日
演説会案内。 活版 一通
（付）「本期職員二投票スヘキ人名」 活版 一枚
（付）職員投票用紙 二四枚

一〇〇 徳大寺実則 書翰

1 明治 一〇 年 一 一 月 一 日
コレラ流行につき、侍医差遣。 墨書 一通
2 明治 一〇 年 一 一 月 一 日
下賜目録送付。 墨書 一通

十時（立花家扶） 書翰

* 明治 一 七 年 一 一 月 七 日
（曾我祐准宛、谷干城宛曾我祐准書翰に同封）【↓八二―4書翰】

一〇一 富田鉄之助 書翰

1 明治 二四年 五月 二五日
 大津事件、伊伯の意見、粗了解。青木・西郷の進退決定と申す事、今日も発表
 ならず手ぬるきこと驚き入る。御慰問使帝室より彼の帝室へ遣すこと至当、宮
 内大臣に申入。墨書 一通
 * 明治 二六年 六月 一六日
 (西村茂樹・三浦安と連名) 【↓一一三―2書翰】

一〇二 内閣書記官 書翰

1 明治 一七年 一〇月 二日
 (谷乙猪宛) 礼服用参官あるべし。墨書 一通
 2 明治 年 月 日
 (封筒のみ) 墨書 一点

一〇三 内藤耻叟 書翰

1 明治 年 七月 一二日
 (丸山作楽と連名) 神田明神開花楼に出向願う。墨書 一通

一〇四 中岡慎太郎 書翰

1 慶応 三年 六月 一二日
 (板垣退助宛) 中村氏書状の行方懸念、詮議中。墨書 一通

一〇五 長岡護美 書翰

1 明治 一六年 一〇月 一四日
 亜細亜協会、会計囑託変更通知。活版 一通
 (付) 通知 亜細亜協会事務委員北沢正誠 明治一六年一〇月二四日付 活
 版 一通
 2 明治 年 六月 二六日
 鹿児島県書記官島氏転職につき、伺いたし。墨書 一通

一〇六 中沢虎一 書翰

1 大正 三年 三月 八日
 (谷儀一宛) 大楠植村村誌編纂のため、谷泰山先生墓所と墓碑銘につき御詮議
 願う。墨書 一通

(付) 墓碑写 墨書 一枚

一〇七 中島気崢 書翰

1 明治 三一年 六月 一〇日
 衆議院解散、現閣選挙に卑劣手段弄す事、計るべからず、国許同志へ輕挙の挙
 動なきよう御戒飾願う。墨書 一通(二枚)

一〇八 中村弘毅（禎輔・幹之助）書翰

* 幕末 年 三月 一四日

（谷干城と連名、寺村左膳・乾退助宛）【↓九六―17書翰】

1 幕末 年 九月 一三日

袖控。安東鎌次、藤崎吉五郎市中手傷、詮議、御内達。墨書 一通

2 明治 五年 三月 四日

御身前の儀、承知。頃日氷解の趣安心。御令室様御帰県見合せしかるべし。金子三十円御差出、御落握願う。墨書 一通

3 明治 一七年 四月 二七日

岩崎・後藤御招、小生陪席。養蚕網、籠注文。墨書 一通

一〇九 中村勇吉 書翰

1 慶応 三年 九月 四日

（板垣退助宛）小笠原・別府両君何か疑念あり御上京、長崎にて御同藩の方斬夷、種々心配。御助力願う。尊藩事情。薩公・越公・宇和島公御国元引取。墨書 一通

2 慶応（三）年 十一月 二四日

来客帰り次第申上ぐ。墨書 一通

一一〇 長屋重名 書翰

1 明治 一七年 七月 三日

学習院長奉職祝辞。徴兵事務志願兵順調。土屋氏刀剣談、刀剣流行甚だし。漢詩御直し願う。墨書 一通

2 明治 年 六月 二〇日

隣家土屋氏肺炎病状。墨書 一通

中山左衛士 書翰

* 幕末 年 四月 二七日

（前野源之助と連名）【↓一三六―1書翰】

一一一 鍋島直彬 書翰

1 明治（一九）年 一月 四日

旧臣愛野静雄紹介、面接願う。墨書 一通

2 明治 二八年 十二月 二二日

ありがたき筆紙無量の感慨、一両日中に参上。墨書 一通

一二二 南部利祥 書翰

1 明治（二六）年 七月 二二日

（谷儀一宛）東宮殿下沼津行啓、御携帯の書籍のこと。墨書 一通

一一三 西村茂樹 書翰

1 明治 二四年 五月 一三日

条約改正の義、意外なる凶変（注 大津事件）、日本弘道会常会にて演説願う。
墨書 一通

2 明治 二六年 六月 一六日

（富田鉄之助・三浦安と連名）兼ねて御承知の外交の件につき星ヶ岡茶寮へ来
会願う。墨書 一通

一二四 乃木希典 書翰

1 明治 四〇年 七月 六日

学習院卒業証書授与式案内。活版 一通

一二五 野本平吉 書翰

1 慶応 三年 一月 五日

寺村の着より模様変わる。建白書大いに行わる、大きに手戻り。京師行人選。
後藤象二郎の姦曲、藩内状勢。墨書 一通

一二六 萩原汎愛（随処） 書翰

1 明治 年 四月 一三日

一昨日御馳走多謝、席上拙吟を供す、御叱正願う。墨書 一通
（付）漢詩 四月一日 墨書 三枚

一二七 旗野士郎 書翰

1 明治 一六年 一〇月 二二日

着京、昇堂の日伺。墨書 一通

一二八 波多野敬直 書翰

1 明治 四二年 三月 二日

富岡男の事、御配慮、御礼。墨書 一通

一二九 馬場勝弥 書翰

1 明治 二九年 一〇月 二九日

（親戚・友人と連名）故馬場辰猪八周年忌案内。活版 一通

一二〇 馬場来八 書翰

1 明治 一六年 一〇月 二〇日

安並雅水病死のこと。墨書 一通

一一二 馬場辰猪 書翰

1 明治一三年一月二日 賀状。墨書 一通

一二一 林勝好 書翰

1 明治一四年一月二三日 明朝參殿御在宿願う。過日御拝承の御事件都合良く運ぶ。墨書 一通
2 明治 年 六月二五日 来廿七日高知県令御招につき、参邸願う。墨書 一通

一二二 林通嘉 書翰

1 明治 年 六月二二日 馬匹鳳林号約定済、他の馬匹選定のこと回答あり。墨書 一通

一二三 土方久元 書翰

* 明治(一五)年三月一日 (佐佐木高行宛、谷干城宛佐佐木高行書翰に同封) 【↓五六―7書翰】

1 明治(二一)年一月五日 辞表御聞届、三浦中将学習院長仰せつけらる。聖上思召により親任官に内定、
帰京乞う。堀江少将山県に随洋行内決。速やかに帰京勧告。墨書 一通
2 明治(三七)年六月二〇日 神山家子息面会、補員撰挙あればよろしく願いたし、小沢男によろしく御伝え
願う。墨書 一通

3 明治 年 四月一八日 旧知事公との例会案内。墨書 一通
4 明治 年 九月一六日 明十七日例会、風邪につき御断。墨書 一通

一二四 平松宣棟 書翰

1 明治一七年七月一四日 受爵祝詞。墨書 一通

一二五 広瀬進一 書翰

1 明治 年 七月一七日 大海原尚義より願、市ヶ谷田町三丁目所有の空地譲渡を願う。墨書 一通

一二六 福富六郎次 書翰

1 明治(三)年九月一三日 改革の一条、一時沸騰より退助殿帰国。何卒御配慮を以て気長く御勉強願う。

御子息マイヤーと勉強。 墨書 一通

一二八 藤川三溪 書翰

1 明治 年 二月 一日
『経国遠図』の序文願う。 漢詩御一笑。 墨書 一通

一二九 古莊嘉門 書翰

1 明治(二三)年 二月 七日
福富と約し今夕尊邸へ罷出、杉浦新聞上の事やら身上につき存念を提出したく罷出る由。 墨書 一通

一三〇 別役成義 書翰

1 明治 一二年 三月 五日

身前の儀、御配慮多謝、今以て運ばず、御模様伺いたし。 官舎(注 熊本)修繕料御送付願う。 土官学校出版書籍有終社に申受けたく一同希望。 墨書 一通

(付) 漢詩 墨書 一枚

一三一 星岡茶寮 書翰

1 明治 一七年 六月 一六日
本寮略落成につき開席招待。 墨書 一通

一三二 細川潤次郎 書翰

1 明治 一七年 六月 二〇日
三位公痛所あり出席なり難し。 日延しかるべし。 墨書 一通
2 明治 三七年 三月 一日
輔仁会春季大会御来臨案内。 墨書 一通

一三三 細川護全 書翰

1 明治 二六年 九月 二七日
(谷儀一宛) 父護久弔問の御礼。 墨書 一通

一三四 前田利嗣 書翰

1 明治 一八年 一〇月 二〇日
談話会参会御断。 墨書 一通

一三五 前野悦次郎 書翰

1 慶応三年一〇月五日

御飛脚には江戸表御引上の様、江戸浪士共は如何。近々二大隊出兵楽しみならるべし。墨書 一通

2 慶応三年一〇月一日

（谷干城・毛利恭助宛）寺村氏帰着委細承知愕然のいたり、貴兄御同意なるや。国許、種々議論、榎論専ら行われる。横田源作ら四国中国探索仰せつけられ両日中に足、江戸一事委曲御申越し願う。【『谷干城遺稿』上巻、四八頁に掲載】墨書 一通

一三六 前野源之助 書翰

1 幕末 年 四月二七日

（中山左衛士と連名）新井多司馬の事件、御示談申さずては決し難し。墨書 一通

牧野貞寧 書翰

* 明治一七年 七月一七日

（山口弘達・佐竹義理・分部光謙・大久保忠順・有馬純臣と連名）【↓一六一—1書翰】

一三七 松方正義 書翰

1 明治一八年 二月二八日

開拓使事業報告書贈呈。墨書 一通

2 明治（二四）年 二月一日

貴族院へ建議案提出、御面談致したきも、提出にいたり時期遅れ遺憾。墨書 一通

一三八 松園忠貫 書翰

1 明治一六年 九月二二日

長崎の招魂場新たに立直、朝廷の御威光も立、欣躍の至。畿内同感者氏名、地券状十八年の改正で名義改正すべしと奮発。当地民間は次第に減ず。王土弁と題する書贈呈。墨書 一通

一三九 松邨精一郎 書翰

1 明治 年 四月二三日

保晃会会長、上野新坂下温泉に名流招待。墨書 一通

一四〇 丸岡完爾 書翰

一四一 丸田秀実 書翰

1 明治一四年 一二月 二日 檜垣検事広島赴任につき一会案内。 墨書 一通

1 明治四四年 一月 一〇日 駆逐艦進水式案内。 活版 一通

一四二 丸山作楽 書翰

* 明治 年 七月 一二日 (内藤耻叟と連名) 【↓一〇三―1書翰】

1 明治 年 七月 二三日 約束の品送付、謄取の上返却願う、秘書の件一見次第拝趨。 墨書 一通

一四三 三浦梧楼 書翰

1 明治(二二)年 一二月 一四日 勅諭令旨の摘要、皆忘失、始末痛嘆の至、大鳥の代に用いざるに原因。一時暗黒世界学習院は、是等の不忠実に発す。今般旧跌を踏むも大主意は変換なし。 墨書 一通

2 明治 年 月 二四日 切り絵図差出。講和の真相も相知れ申すべし。富田・曾我へよろしく。 墨書 一通

一四四 三浦安 書翰

1 明治二四年 五月 二二日 遣露使の延引、露の辞退による、しからば我が進退露の呼吸を仰ぐ、依頼附託の弱気、驚くべき廟議。 墨書 一通

2 明治二四年 五月 二六日 明廿七日貴族院に参集、東久世・黒田・河田・山口・高崎・海江田・富田へ案内。 墨書 一通

(西村茂樹・富田鉄之助と連名) 【↓一一三―2書翰】

一四五 南亮輔 書翰

1 明治(一四)年 一二月 二四日 片岡直温身前のこと、内務省准判任都合よし、佐佐木参議、土方大輔同様の思召。同県人某、他の参議連に示談。同志の信用にも大いに関涉、思召御命示願う。 墨書 一通

2 明治 年 四月 四日 県庁の模様聞くに堪ず。谷文太郎弟美正孟臣、郡書記辞職上京につき、御引き廻し願う。寺田春蔭依頼の趣、御報せ願う。 墨書 一通

一四六 宮地貞香 書翰

1 明治一二年 五月一日

(国沢大八郎・村山素行と連名) 県庁、坂本建東出頭申来たり罷出。かねての願書へ附箋相廻、一読了解し難し。取下げ申出。 墨書 一通

一四七 宮地森城 書翰

1 明治 年 三月 八日

別紙の者(注 大高坂慶親) 身前の事、警察課又は裁判所採用依頼。 前野悦次郎、吉本新八、佐々之治の三名免職。 墨書 一通

(付) 人名書 大高坂慶親 墨書 一枚

一四八 三吉慎蔵 書翰

1 明治 年 七月 二十四日

梨本宮、多田王水泳所へ御出張、取計依頼。 墨書 一通

一四九 村田保 書翰

1 明治二四年 二月 二三日

予算案議定細則第十三条憲法の主義に悖り蛇足。第十六条衆議院同意せざるとき貴族院は如何処分すべきや。 墨書 一通

2 明治二四年 三月 一日

僅少の時日においては、予算委員に受理せざる方勝れり。予算案大体議にて経過となさば容易ならざる慣習となる。 墨書 一通

一五〇 村田綱太郎 書翰

1 明治(二〇)年 三月 一七日

御病勢如何。巴里御出府を待つ。 墨書 一通

一五一 村田経芳 書翰

1 明治二八年 九月 一二日

同姓谷水陰殿御死去、御悔み。 墨書 一通

2 明治 年 一二月 一八日

脳充血症七日間転地療治。 墨書 一通

村山素行 書翰

* 明治一二年 五月 一八日

(国沢大八郎・宮地貞香と連名) 【↓一四六―1書翰】

一五二 森下幹守 書翰

1 明治 年 五月 三日
豊景様御事、豊濟様御出、三位様・豊尹様御機嫌伺、五味様へ御出。月賦金百
円公文氏へ渡につき、御受取のこと。墨書 一通

一五三 安井小太郎 書翰

1 明治 三〇 年 一二 月 三二 日
新年賀儀喪中のため、差控。墨書 一通
2 明治 (三六) 年 六月 一〇 日
張之洞に面会。小子身分非職学習院教授、復職の見込。北京上下の有様嘆息、
張之洞も西太后に覚えめでたからぬ由。袁世凱も同様。墨書 一通

一五四 安井息軒 書翰

1 明治 八 年 一月 二九 日
瀛環史略永らく拝借、耶蘇追討相済みにつき、辺壁、落手願う。墨書 一通
2 明治 年 二月 一一 日
兵隊教師の儀、老書生断りきたり、盛岡侯家来工藤寿太郎、御面談御勘考の上、
御決断願う。墨書 一通
3 明治 年 一二 月 一四 日
元大岡氏家来小川逸平引見依頼。墨書 一通

一五五 柳谷謙太郎 書翰

1 明治 (一九) 年 七月 一二 日
(谷干城御家扶宛) 別紙位記送付。(別紙無し) 墨書 一通

一五六 柳原義光 書翰

1 明治 二七 年 九月 二 日
父前光重体の報。墨書 一通

一五七 山内豊範 書翰

1 明治 一六 年 三月 一二 日
(日付は消印) 戊辰戦慰霊文章稿、明治一三年九月。墨書 一通

一五八 山県有朋 書翰

1 明治 (四) 年 一二 月 五 日
御旧県民心煽動紛擾の風説拝承、貴下出張は好都合。都下安静、省中無事。小
別離の一酌、板氏の耳に触れ、意味甚だ齟齬、頗る狐疑、劣生破論。別後の情
態概略、急使に托す。墨書 一通
2 明治 六 年 九月 八 日
廃砲一条、当熊本の方は全保存の部にあり、御申立に及ばず。墨書 一通

3 明治(一〇)年 八月 一八 日

延岡地方警備嚴重指令、豊後口着手。僅少の兵にても御出張御下命願う。【『谷干城遺稿』下巻、四七七頁以下に掲載】 墨書 一通

4 明治 年 一月 二〇 日

御来遊願う。晚餐差上たし。 墨書 一通

5 明治 年 月 一六 日

貴翰拝読、事実相違、細縷面晤。 墨書 一通

一五九 山川左一右衛門 書翰

1 文久(三)年 七月 二五 日

京師御模様、三条様参殿の都合、この頃如何。品川様の思召拝承仕らず、勤王、四月八日の変より諸事疑念あらせらる。僕等建白、その通りにも相ならず。近習目付拝辞諸説心痛。文武館次第に不盛大息。 墨書 一通

一六〇 山木良一郎 書翰

1 明治 一六年 一月 六 日

山木実兄国井死亡通知。 墨書 一通

一六一 山口弘達 書翰

1 明治 一七年 七月 一七 日

(牧野貞寧・佐竹義理・分部光謙・大久保忠順・有馬純臣と連名) 学習院在学中の御厚情拝謝。築地精養軒晚餐招待。 墨書 一通

一六二 山地元治 書翰

1 明治 二三年 三月 二七 日

火事御慰問佳品恵贈御礼。 墨書 一通

一六三 山田栄造 書翰

1 明治 一七年 五月 五 日

通鑑それぞれへ通送。斯文学会献納書通鑑その他本日差上。左傳一部四書一部その他呈上、女四書二部差上。 墨書 一通

2 明治 一七年 五月 一五 日

資治通鑑送付。第六回分目今植字、出来次第送付。左傳二部他松木屋忠助支店へ差出。 墨書 一通

(付) 受領書 高知海南分校 修道館宛 明治一七年二月八日付・二月二六日付 墨書 一綴

一六四 山本邦彦 書翰

1 明治 年 二月 二四 日

書籍八品受領、撃剣器械華族会館から借用、生徒の望、ブランコ等の器械。墨書 一通

一六五 姚文棟 書翰

1 明治 一七年 五月 五日

偕楽園、作詩酒の会案内。墨書 一通

一六六 横田祐造 書翰

1 慶応 三年 (三) 月 日

兵庫の大事件、大行天皇の遺勅を奉す外なし。谷漢詩評。墨書 一通

一六七 吉井友実 書翰

1 明治 二一年 一月 一六 日

本月一日付御暇願、学習院御用掛被免につき返却。宮内省野紙 墨書 一通
(付) 御暇願 谷干城 土方久元宮内大臣宛 明治二一年一月一日付 学習院御用掛、病氣療養のため更に四週間の暇を願う。墨書 一通
(付) 時任為基送状 谷干城宛 明治二一年一月二四日付 別封回送。高知県野紙 墨書 一通

一六八 吉田次郎 書翰

1 明治 一〇年 一月 三〇 日

茨城辺巡回。後事は沼間へ申置。墨書 一通

2 明治 一二年 六月 三日

来九日、王韜同道参上。墨書 一通

3 明治 (二二) 年 六月 一日

(付) 王韜書翰 吉田次郎宛 墨書 一通

4 明治 (二二) 年 七月 一八 日

大醉拝謝、王韜に出会、御礼申上ぐ。墨書 一通

王韜より別紙の通り申越。大山中将へ直に内願。同君苦情、別紙の通り。(別紙無し) 墨書 一通

一六九 吉田文三 書翰

1 明治 一七年 八月 六 日

高諭に従い丸山作樂の説を承る。同胞会に加盟尽力の決心。福島新聞編輯に従事し同胞会設立のこと。閣下学習院長御栄任欣喜。学習院役員の末席に列する栄を得たし。墨書 一通

一七〇 吉田正春 書翰

1 明治一七年 二月 一日 来廿一日拝趨、御繰合せ在宅願う。 墨書 一通

一七一 吉田義静 書翰

1 明治一四年 一二月 二日 雜誌題辭御書下されたし。 墨書 一通
2 明治 年 四月 八日 同県安場書生鈴木、御筆蹟懇望。 墨書 一通

一七二 萬井友雲 書翰

1 明治 年 一月 二三日 五岳熊本城下の詩入手、拝呈。 墨書 一通

分部光謙 書翰

* 明治一七年 七月 一七日 (牧野貞寧・佐竹義理・山口弘達・大久保忠順・有馬純臣と連名) 【↓一六一—1書翰】

一七三 不明 書翰

1 明治 年 三月 一九日 (直行署名) 御借用金本月期限。御延期の思召あらば、手数料金御廻し願う。 墨書 一通

書類の部

幕末・維新

- 一七四 替地割 谷干城 文久元年 墨書 一枚
致道館建築につき敷之内住居の士へ下さる。
- 一七五 中川侯を責問一件次第 文久二年一〇月二十九日 墨書 一枚
中川修理大夫、義士小河弥右衛門幽閉につき、三藩の士伏見において応接責問。
- 一七六 時勢の件大略目録 松浦八郎カ (文久二年 墨書 一枚
「是非御留り願度事」以下、時勢の大略項目書上。
- 一七七 意見書草稿 谷干城 山内豊範宛 (文久二年 墨書 一綴
「文久二年京都三太守様言上」、器械充実を待つ論は、今日をおくる抜け口上。諸公土着急務。関東は関東の旗本に
関八州の兵を以て防衛。各国境内を固め、京師へは有志の諸侯を出し御守護。攘夷御決心のこと。
- 一七八 意見箇条書 谷干城 藩公(山内豊範)宛 (文久三年 墨書 一枚
勅命相下らば、忠勤のこと、以下書上。
- 一七九 言上草稿 谷干城 山内容堂宛 (文久) 墨書 二枚
当今公武の御周旋、御因循の御醜名を蒙る。全く輕格の者跋扈の所業。暫く周旋御辞退遊ばされ、其上は叡慮の俣
に進退仕るべし。
- 一八〇 旨主 里程覚 谷干城 慶応三年六月 墨書 一枚
薩土盟約写。里程覚 西千方より長崎、返り路長崎より用居。
- 一八一 連署献言者名書上 谷干城 慶応三年 墨書 一枚
世に「ブンブク茶カマ」と称す土佐藩佐幕派連署建言者名前。【『谷干城遺稿』上巻、五五頁に掲載】
- 一八二 戊辰戦争日光道戦記 谷干城 慶応四年閏四月一八日より同月二二日 墨書 一枚
大桑村・小佐越村・高德村、大沢道・日光道戦記。
- 一八三 脱藩人引戻につき意見書草案 谷干城 幕末 墨書 一枚
脱藩人、終始主家を忘れ申さず、真の忠臣。其国引取べし。(残欠)

意見書・草稿類

明治初期（一八四〇～一八八）

一八四 意見書草稿 谷干城 明治三年二・三月頃 墨書 一枚

富永有隣を追う論に不同意。

一八五 大改革綱領十八ヶ条 軍務局 明治三年八月一日 墨書 一枚

谷干城立案。至急御施行の条件、十八ヶ条要目。

一八六 大改革綱領十八ヶ条 軍務局 明治三年八月一日 墨書 一枚

（谷干城筆）史料「二八五、大改革綱領十八ヶ条」と同文。

一八七 斯文学会会員に対する演説 谷干城 明治（二四）年 墨書 一枚

斯文学会学舎永続の事、賛助を乞う。

一八八 筆談録 明治一七年頃 墨書 一括（五八枚）

谷干城・張滋昉・姚文棟・島村干雄 他。

西南戦争（一八九〇～一九一）

一八九 丁丑熊本籠城日記 加藤某 明治一〇年二月一八日より同年四月一八日、三月一五日・四月二六日条、覚書 一綴 墨

一九〇 封筒綴 山県有朋 他 明治一〇年 墨書 一綴

西南戦争中往復書簡封筒のみ 三三通分

一九一 熊本籠城間死傷者 西南戦争六十年会 昭和二年 活版 一枚

西南戦争六十周年記念碑裏面

（付）絵はがき「熊本城之詩」・「谷干城銅像背誌」・「谷干城將軍の像（原型）」 三枚

明治二〇年意見書関係（一九二〇～一九六）

一九二 上奏文案 谷干城 明治二〇年七月 墨書 一枚

政費節減尤も急務。条約改正の事、国権の毀損を憂う。条約改正中止すべし。意見書第一、第二奉呈。

一九三 上奏文控 谷干城 明治二〇年七月二〇日 墨書 一枚

史料「二八八、上奏文案」と同文。

一九四 「帝室ト人民トノ關係」草稿 谷干城 明治（二〇）年 墨書 一枚

帝室を全く政治海の上に居へ、衆子の輿望により政事を執らしむべし。

一九五 意見書草稿 谷干城 明治（二〇）年 墨書 一枚

華族両学校の事、新聞言論の自由、進路を改新に取る事、形体の開進は漸の事、節儉、護衛巡查廃すべき事、条約改正云々 他。

一九六 「専売特許局ノ建築ハ不急中ノ尤不急ナルモノナリ」草稿 谷干城 明治（二〇）年 墨書 一通

議會開設後（一九七〜二〇七）

一九七 演説草稿 谷干城 明治三六年 墨書 一枚

演説（板垣退助）要項、谷評。海軍拡張・地租増徴・鉄道繰延 他。

一九八 意見書草稿 谷干城 明治（三六）年 墨書 一枚

「日本世界ノ雇兵タルノ準備ナル歟」

一九九 「戦争ハ国家ノ大病也」草稿 谷干城 明治（三七）年 墨書 一通

二〇〇 意見書草稿 谷干城 明治（三七）年 墨書 一枚

戦時国民の心得。

二〇一 質問草稿 谷干城 明治 墨書 一枚

満州にて発行の軍事手形総数、三七・八年戦役献金、遼東租借年限の件。

二〇二 「鉄道ニ関スル意見」草稿 谷干城 明治三九年三月二五日草 墨書 一通

鉄道買収反対、軌道条例を改め、広軌に変更すべし。

二〇三 意見書草稿 谷干城 明治四二年三月六日 墨書 一枚

戊申詔書節録。競馬の善後策に関する請願について。

二〇四 競馬の善後策に関する請願覚 谷干城 明治四二年三月 墨書 一枚

(付)「競馬法案」『時事新報』切抜 明治四二年三月三日号 活版 一枚

(付)「競馬問題」(新聞切抜) 活版 一枚

二〇五 演説草稿 谷干城 明治四二年三月一〇日 墨書 一通

東京市自治廃止、官選都長官新設反対。

二〇六 覚書 谷干城 明治 墨書 一枚

歴史の研究、高等人士の注意を要す。

二〇七 近衛公爵に答える書草稿 谷干城 明治 墨書 一綴(三枚)

近衛公爵に答えて、諸葛孔明の尤も我が師たるべき条を挙ぐ。

諸氏意見(二〇八〜二〇九)

二〇八 意見書 尾崎延太郎 明治二五年二月 墨書 一冊

国家の浪費、風俗の退廃。政府の緊務、非常の大節儉を挙行し、軍備拡張すべし。

二〇九 「正心座右之箴」 墨書 一綴

(付)「附言」 墨書 一枚

(付)「凡士卒死心無クシテ」云々 墨書 一枚

日記

二一〇 日記 谷干城 明治二四年四月一日より明治二六年一月七日 墨書 一冊

【「谷干城遺稿」上巻、八六八頁〜八九〇頁に掲載あるも、異同あり】

(付)「墓前の未亡人」(『毎日新聞』切抜 明治二五年八月二〇日号) 活版 一枚

詩・文

「八雲双紙」(二二一)～(二二二)

二二一 「八雲双紙」一卷 谷万七影井(題 谷干城記) 幕末 墨書 一卷

二二二 「八雲双紙」二卷 谷万七影井(題 谷干城記) 幕末 墨書 一卷

漢詩(二二三)～(二二四)

二二三 「送谷君使海外序」 松岡七助カ 谷干城宛 (慶応三)年二月 墨書 一綴
漢文送辞。

二二四 維新时期漢詩 谷干城カ 幕末 墨書 二枚

五言絶句二編、偶感 五言絶句一編。

二二五 詩文 竹村修 幕末 墨書 一枚

織田、徳川、豊太閤。

二二六 漢詩 谷干城 明治一二年 墨書 一枚

函館偶成。『谷干城遺稿』下卷、九一七頁に掲載あるも、異同あり

二二七 漢詩「北遊艸」 明治二五年 墨書 一綴(六枚)

「壬辰八月將遊於西比利亜及清韓二国賦此留別都門諸友」、「登釜山古城」、「元山」、「金角港上有感賦長歌」他。

二二八 漢詩 谷干城 明治 墨書 一枚

七言絶句一編。

二二九 漢詩 谷干城 明治 墨書 一枚

七言絶句一編。

二二〇 漢詩草稿 谷干城 明治 墨書 一枚

七言絶句一編。

一一二一 漢詩 九淵 明治 墨書 一枚
七言絶句一編。

一一二二 漢詩 牧老翁 明治 墨書 一枚

一一二三 漢詩 甕江（川田剛） 明治 墨書 一枚
五言絶句一編。

一一二四 「蕪詞」 杉浦重剛 明治 墨書 一枚
隈山將軍挽歌。

和歌（一二五～一二四）

一二二五 和歌一首 谷万七影井 墨書 一枚

一二二六 幕末和歌 山川良水他 幕末 墨書 三綴、（付）一枚

一二二七 皇后宮御製 皇后宮 明治一五年 謄写 一枚
「河水久澄」、權掌侍敦子謹書。

一二二八 「皇后宮御歌御うつし」 皇后宮 明治 墨書 一枚
「男女同權」、「使民以時」、「民間困苦」他。

一二二九 皇后宮御詠 明治 印刷 五枚
山岡鉄舟筆。

一二三〇 和歌 松尾山 七首 谷干城 明治三二年 墨書 一枚
【『谷干城遺稿』下卷、六一五頁に一部掲載】

一二三一 「道のしほり」 曾我文子 明治三六年六月写 墨書 一綴
歌集。

一二三二 詠草 墨書 一枚

「亡き君の五十日祭に奉りし歌」他。

一三三三 和歌 墨書 一枚

「送別拙韻一首」

一三四四 「和歌乃林」 こしむら琴子 墨書 一綴

和歌集。

揮毫（二三五～二四一）

二三三五 揮毫案 谷干城 明治二六年三月 墨書 三枚

「流芳千歳」

二三三六 揮毫案 谷干城 明治二六年四月 墨書 一枚

「得于心應于手」

二三三七 揮毫案 谷干城 明治 墨書 一枚

「憂道不憂貧」、「学而時習」他。

二三三八 題字 谷干城 墨書 一枚

「成章堂」

二三三九 題字 谷干城 都築兄宛 明治 墨書 一枚

「觀湖堂」

二四〇 碑文習作 安井衡撰、谷干城書 明治 墨書 二枚

二四一 碑文署名習作 谷干城 明治 墨書 二枚

拓本・画

谷干城撰文・篆額（二四二～二四七）

二四二 「正六位陸軍中佐北村重頼墓」 谷干城撰、公文修寿書 明治二年一月 拓本 四枚

二四三 「斤斤其明」 有栖川熾仁親王篆額、谷干城撰、山田顯義書 明治二年九月二十四日 拓本 二枚
熊本県人殉難碑。

二四四 「軍人龜鑑」 熾仁親王篆額、谷干城撰、成瀬温書 明治一六年一月 拓本 一枚
陸軍伍長谷村計助碑。

二四五 「嶺南平部君之碑」 谷干城篆額、川田剛撰、小此木包之書 明治二八年一〇月 拓本 一枚

二四六 「猪瀬鉄之助招魂之碑」 谷干城 明治三二年一月 拓本 一枚

二四七 「金鉄其腸」 山縣有朋篆額、谷干城撰 明治三三年五月 拓本 一枚
中村重遠碑文。

収集拓本（二四八～二六九）

二四八 勿来の関碑 賀茂季鷹識 文政五年三月一日 拓本 一枚

二四九 「結城神君之墓」 津阪孝綽撰 文政一二年一〇月 拓本 一枚

二五〇 「致良知」 河田興識 安政五年五月 拓本 一枚

二五一 「錦山神祠改建記」 安井衡撰、成瀬温書 明治八年八月 拓本 一枚

二五二 「渡辺樵山墓碑銘並序」 徳川茂承題額 明治八年一月 拓本 一枚

二五三 岳飛碑文 太田資政識、久我金次郎彫工 明治一一年仲秋後三日 拓本 一枚

二五四 「駐蹕之碑」 徳大寺実則篆額、杉孫七郎撰 明治一二年二月 拓本 一枚
明治一一年天皇巡幸。

二五五 「鉄石先生招魂之碑」 中沼之舜篆額、村山善識 明治一四年九月 拓本 一枚
片山鉄石碑。

- 二二五六 「從五位吉井君墓表」 三条実美 篆額、土方久元 撰、日下部東作 書 明治一五年五月 拓本 一枚
- 二二五七 「辟邪泉之銘」 杉孫七郎 撰并篆額、小西正蔭 書、志鎌三秀 刻 明治一五年一〇月 拓本 一枚
木賀温泉碑文。
- 二二五八 「軍人軍属合葬之碑」 熾仁親王 篆額、重野安繹 撰、巖谷修 書 明治一六年一〇月 拓本 一枚
台灣出兵戦死者佐古墓地改葬碑。
- 二二五九 「水道碑記」 徳川家達 篆額、肝付兼武 撰、金井之恭 書 明治一八年一月 拓本 一枚
- 二二六〇 「藏蒙古冠碑」 毛利元徳 篆額、肝付兼武 撰、金井之恭 書 明治一八年三月 拓本 一枚
- 二二六一 「上田先生之碑」 徳川茂承 篆額、三浦安 撰、長光 書 明治一九年一月 拓本 一枚
上田専太郎墓碑。
- 二二六二 「捐躬報国」 熾仁親王 篆額、重野安繹 撰、秋元興朝 書 明治二五年一月 拓本 一枚
白川役陣亡諸士碑。
- 二二六三 「正二位子爵谷君墓誌銘」 松本豊多 撰并書 明治四四年 拓本 二枚
明治四四年五月一三日没。
- 二二六四 「夫人国澤氏墓碑銘」 島村千雄 撰、松本豊多 書 明治四四年 拓本 二枚
明治四二年一月二十九日没。
- 二二六五 「広井磐之助墓碑」 渡楫雄 撰 拓本 二枚
- 二二六六 「楓橋夜泊詩」 寒山寺 拓本 一枚
- 二二六七 「多胡碑」 拓本 一枚
- 二二六八 「阿蘇文書拓本」 三枚
綸旨尊氏直義追討 延元元年三月二五日阿蘇前大宮司館宛、征西大將軍御下向ノ事情 延元元年九月一八日。
- 二二六九 「金鑽神社縁起」 平山省斎 題、堀越夫 識 拓本 二枚

画(二七〇～二七一)

二七〇 谷千城肖像 明治一〇年頃 石版画 一枚

二七一 写景 近藤直 明治一〇年一〇月一日 鉛筆 一枚

「鹿児島県下鶴崎神社裏午ヨリ軍団埋葬地及多賀見山ヲ望ム」

目録類

二七二 「谷家之至宝 秦山所藏目錄」 明治四四年六月調・大正二年五月山内家へ献納 墨書 一冊

医方・夷談・論弁・法帖・九十九本草・本草・兵法・土佐考証・土佐国懿行紀事・註釈・地志・音楽・和字書・限山類書・家稿 他。

二七三 「限山玩書目錄控」 大正二年四月調・同年五月山内家へ献納 墨書 一冊

書籍

二七四 『修身女訓』卷二 岡本賢蔵編 明治一五年九月 活版 一冊

嘉言第三・嘉言第四・嘉言第五。

二七五 「谷千城意見書」 某写 明治二〇年七月 墨書 一冊

国家の大要 情実の弊、内閣の弊 他。

(注) 谷家において古書店より購入したもの。

二七六 『皇室典範』 明治二二年二月一日 活版 一冊

(付) 覚「伊予国松山 日下宗健」 墨書 一枚

二七七 『山内史略一名百一餘談筆記』全 平石氏人 明治三三年六月八日 活版 一冊

在東京 土佐 長屋重名口演。

二七八 『駿河土産』 近藤瓶城 明治二七年九月三〇日 活版 一冊

二七九 『故舊過訪録・遊従及門録』全 安井小太郎 編 明治三〇年一月二八日 活版 一冊

「序」 安井息軒（安政六年二月二四日）。

二八〇 『他山遺稿』完 外崎寛 編 明治三二年二月二五日 活版 一冊

工藤主善遺稿。

二八一 『乃木將軍餘香』 飯野三一 昭和二年四月一日 活版 一冊

乃木希典遺墨遺品展覽会 三越呉服店。

二八二 「谷家天球儀の調査」 小川清彦・神田茂 昭和九年三月 活版 一冊

『天文月報』第二七卷三号別刷。

二八三 『秦山集』仁 谷重遠 明治四三年二月二七日 活版 一冊

「谷重遠著」印あり。

二八四 『秦山集』義 谷重遠 明治四三年二月二七日 活版 一冊

二八五 『秦山集』礼 谷重遠 明治四三年二月二七日 活版 一冊

二八六 『秦山集』智 谷重遠 明治四三年二月二七日 活版 一冊

二八七 『秦山集』信 谷重遠 明治四三年二月二七日 活版 一冊

家計関係

二八八 「差上申金子請取証書之事」 山田重右衛門 谷干城様御内宮崎春次宛 明治六年六月 墨書 一枚

市ヶ谷田町地所二三四五坪御譲渡。

二八九 「地所永代売渡証」 売主谷水陰・証人国沢諒吉 谷干城宛 明治一二年二月二七日 墨書 一綴

久万村本田地所。

（付）「公証願」 売渡人谷水陰・買受人谷干城 区长津田弥左衛門宛 明治一一年二月二七日

二九〇 「藤樹書院並遺物保存主意書」 發起人西沢正太郎 他 明治三〇年一〇月 活版 一枚

義捐金送附願う。

二九一 土佐郡三谷土地売渡証 売主永野楠弥 谷干城宛 明治三二年八月三日 墨書 一綴

(付) 領収書 永野楠弥 谷干城宛 明治三二年七月二二日 一枚

二九二 「基本金募集ノ旨意」 日本弘道会 明治三七年二月 活版 一枚

日本弘道会基本金募集規程。

二九三 領収書 森村市左衛門 谷干城宛 明治 年七月二〇日 墨書 一枚

陸軍定規御馬具 他。

二九四 領収書 森村裁縫店 谷干城執事宛 明治 年二月一〇日 墨書 一枚

指輪御直代 他。

二九五 「糸目勘定書」 川島商店 谷干城宛 明治 年一二月 上田屋商店野紙 墨書 一綴

御注文織物工賃勘定書。

二九六 「三谷御別荘ニ関スル書類」 大正三年七月一七日写 墨書 二枚

見積価格。

二九七 代価覚 墨書 一枚

筆筒・同金物の代価。

写真

谷干城写真 (二九八〜三二〇)

二九八 戊辰戦争時土佐藩兵幹部写真 慶応四年 一枚

谷干城・板垣退助・谷乙猪 他。

二九九 谷干城写真 明治初年 陸軍時代 名刺判 一枚

全身像。

- 三〇〇 谷干城写真 明治初年 陸軍時代 名刺判 一枚
上半身像。
- 三〇一 陸軍時代集合写真 明治初年 名刺判 一枚
- 三〇二 西南戦争時熊本籠城幹部写真 明治一〇年 同二枚
- 三〇三 谷干城写真 明治一〇年 西南戦争後 熊本富重台紙 一枚
- 三〇四 陸軍時代集合写真 明治 西南戦争後 東京回春堂台紙 一枚
- 三〇五 谷干城写真 明治(一〇)年 西南戦争後 同三枚(内、名刺判一枚)
- 三〇六 谷干城写真 明治二三年 鈴木真一台紙・名刺判 一枚
- 三〇七 MISSIONS MILITAIRES 写真 明治一九年八月 一枚
ロシア視察時の集合写真(サンクトペテルブルグ市クラスノエセロにて撮影)。
- 三〇八 谷干城写真 明治二〇年代 鈴木真一台紙・名刺判 一枚
- 三〇九 シュタイン翁追弔祭写真 明治二三年一〇月二三日 丸木利陽台紙 一枚
- 三一〇 谷干城集合写真 明治 塚本楊東製台紙 同二枚
- 三一一 谷干城写真 明治 小川一真台紙 一枚
- 三一二 谷干城写真 明治三五年二月一日 鈴木真一台紙 一枚
- 三二三 谷干城と家族写真 明治三七年二月一九日 一枚
- 三二四 高知県第一中学校集合写真 明治 一枚
現 追手前高等学校。
- 三二五 皇太子殿下高知奉迎記念写真 明治四〇年十一月 高知 藤本台紙 一枚
土方久元・阪井重季・内田政敏 他。
- 三二六 谷干城と家族写真 明治四二年 森本台紙 一枚

三一七 谷干城集合写真 明治四三年頃 一枚

三一八 谷干城写真 明治 一枚

三一九 谷干城と家族写真 明治四四年 一枚

三二〇 谷干城写真 明治四四年 一枚

谷玖満子写真(三二一～三二八)

三二一 谷玖満子写真 明治一〇年 塚本楊東製台紙 一枚

三二二 谷玖満子写真 明治一〇年代 Nakasima.No.5台紙 一枚

三二三 谷玖満子写真 明治一三年 一枚

三二四 谷玖満子写真 明治一七年頃 鈴木真一台紙 一枚

三二五 愛国婦人会集合写真 明治 一枚
奥村五百子 他。

三二六 谷玖満子集合写真 明治三九年三月二七日 K.Tomishige台紙 一枚
「熊本城籠城後第三十年ノ記念トシテ」

三二七 谷玖満子集合写真 明治三九年三月二七日 K.Tomishige台紙 一枚
「熊本城籠城後第三十年ノ記念トシテ」

三二八 谷玖満子写真 明治 遺影 岸本台紙 一枚

家族写真(三二九～三三〇)

三二九 谷家家族写真 明治三四年二月八日 森本蓼洲台紙 一枚
谷芳子・谷猛熊 他。

三三〇 谷家家族写真 明治三九年七月一八日 一枚

谷猛熊・谷守人他。

谷干城関係写真（二三二～二三九）

二三二 谷家所蔵乾板焼付写真一括 七枚

（1）谷干城幕末写真一 一枚

（2）谷干城幕末写真二 一枚

（3）谷玖満子写真 紡錘 一枚

（4）谷玖満子写真 機織 一枚

（5）谷玖満子写真 裁縫 一枚

（6）集合写真 二枚

二三二 谷家養蚕場写真 明治 塚本楊東製台紙 一枚

二三三 谷家養蚕場写真 明治 対松館台紙 一枚

三三四 三谷山莊写真 明治四四年五月 二枚

「土佐国三谷山別荘茶室」、「土佐国三谷山別荘より海を望む」

三三五 谷干城・玖満子墓写真 徳写真館台紙 二枚

三三六 熊本城写真 明治 富重台紙 一枚

「呈 谷子爵閣下 乃木希典」

三三七 奥村五百子他写真 明治三八年 佐藤福待台紙 一枚

「満州へ出発ノ際撮影ス」

三三八 土方久元写真 明治四五年二月 巴写真館台紙 一枚

鳩杖を賜う。漢詩。

三三九 銅像除幕式写真 昭和（一一）年 三枚

熊本城 谷干城司令長官銅像除幕式。

その他写真(三四〇～三四一)

- 三四〇 「明治廿七八年日清戦役戦死者弔魂塔 明治卅七八年日露戦役戦死者忠魂堂写真帖」
一冊 明治四二年九月二〇日

- 三四一 「旅順解放露国将校ノ長崎寄港中撮影」写真 一枚

葬祭関係

弔辞(三四二～三六七)

- 三四二 贈祭料 山内豊景 明治四四年五月一四日 墨書 一枚
- 三四三 弔詞 安井先生門下生本田新 明治四四年五月一五日 墨書 一枚
- 三四四 弔詞 貴族院 明治四四年五月一五日 墨書 一枚
- 三四五 弔詞 日本体育会長加納久宜 明治四四年五月一五日 墨書 一枚
- 三四六 弔詞 陸軍戸山学校将校同相当官 谷儀一宛 明治四四年五月一五日 墨書 一枚
- 三四七 弔辞 陸軍士官学校将校団 谷儀一宛 明治四四年五月一五日 墨書 一枚
- 三四八 挽詩 埼玉県川越民利根川丈雄 明治四四年五月望 墨書 一枚
- 三四九 弔詞 愛国婦人会長子爵夫人岡部坻子 明治四四年五月一六日 墨書 一枚
- 三五〇 弔詞 海軍大将樺山資紀 明治四四年五月一六日 墨書 一枚
- 三五一 弔詞 市政講究会副会長波多野敬直 明治四四年五月一六日 墨書 一枚
- 三五二 弔辞 足尾銅山欽毒被害地方青年総代栗原彦三郎 明治四四年五月一六日 墨書 一枚
- 三五三 弔詞 帝国海事協合理事長有地品之允 明治四四年五月一六日 墨書 一枚
- 三五四 弔詞 帝国教育会長辻新次 明治四四年五月一六日 墨書 一枚

三五五 弔詞 刀劍会 明治四四年五月一六日 墨書 一枚

三五六 弔辭 東亜同文会会長鍋島直大 明治四四年五月一六日 墨書 一枚

三五七 弔辭 日本弘道会会長徳川達孝 明治四四年五月一六日 墨書 一枚

三五八 弔詞 日本弘道会飽海支会長菊池秀言 明治四四年五月一六日 墨書 一枚

三五九 弔辭 海南学校同窓会総代山内豊咸 明治四四年五月二四日 墨書 一枚

三六〇 弔辭 高知新聞社楠瀬如龍 明治四四年五月二四日 墨書 一枚

三六一 弔辭 同志総代大西正義 明治四四年五月二四日 墨書 一枚

三六二 弔辭 高知県立中学海南学校長木村猪又次 明治四四年五月 墨書 一枚

三六三 挽詩 斯文学会 明治四四年五月 墨書 一枚

三六四 挽詩 石幡貞 明治四四年五月 墨書 一枚

三六五 弔辭 土曜会幹事長二条基弘 明治四四年五月 墨書 一枚

三六六 弔詞 佐藤正カ 明治四四年五月 一枚

(封のみ)

三六七 献詠 旧金沢藩土塚本正賢 明治四四年五月 墨書 一枚

「谷正二位殿閣下のみまかりたまひしをいたみはへりてよめる」

葬儀(三六八〜三七三)

三六八 記 有栖川宮使 明治四四年五月一五日 墨書 一枚

御柩一対御供。

三六九 榊料 金二千足下賜 墨書 一枚

三七〇 供物「閑院宮」 墨書 一枚

三七一 谷干城葬儀写真帳一 明治四四年五月 B4版 一冊（一四頁）

葬儀写真（祭壇・会葬者・弔辞写真・会葬者集合写真 他）。

三七二 谷干城葬儀写真帳二 明治四四年五月 A4版 一冊（一四頁）

葬儀写真（祭壇・会葬者・弔辞写真 他）。

三七三 「正二位子爵谷君墓碑銘」・「夫人国澤氏墓碑銘」 松本豊多 明治四五年三月二二・同月三一日 墨書 二綴

（付）石碑代領収書 乾熊次 谷代理宇賀幾治宛 明治四五年五月一日 墨書 一枚

履歴・伝記

三七四 谷万七 谷干城履歴書上 谷干城 墨書 一綴（一八枚）

寛政七年二月谷万七生より明治九年一〇月二四日までの谷万七・干城履歴。

三七五 谷干城履歴書上 谷干城 安政三年六月より慶応三年六月二日 墨書 一枚

三七六 谷干城履歴書上 谷干城 慶応三年三月より明治九年一月 陸軍省野紙 墨書 一綴（二枚）

三七七 谷干城履歴草稿 谷干城 明治四年 墨書 一枚

任兵部権大丞

（付）任兵部権大丞 辞令写 墨書 一枚

三七八 免官願控 谷干城 明治五年三月 墨書 一枚

「明治四年一二月、土佐行、山県ト離杯ノ節、岡本謙三郎讒言ニヨリ起コル辞表」

（付）免官願案 谷干城 明治五年二月 墨書 一枚

（付）谷干城覚 朱書 一枚

三七九 長崎出張届草稿 谷干城 明治（一六）年一二月 墨書 一枚

長崎佐古墓地勅祭祭主、帰途病氣につき有馬温泉入浴。

三八〇 谷干城・乙猪・儀一履歴 明治二年より明治二八年 熊本鎮台野紙 墨書 一綴（二枚）

三八一 「国士の典型谷干城子」 曾我祐準 明治四四年 活版 一冊

『太陽』（記念増刊、第一八巻第九号）抜刷 光彩赫々たる熊本籠城・谷子爵と伊藤公・貴族院に於ける谷子爵・逸事数則。

三八二 「谷干城將軍」 寺田梵哉 編 昭和一七年 ペン 一冊

谷干城伝記。

辞令・賞状

谷干城宛（三八三～四七九）

三八三 任高知藩少参事 太政官 谷干城宛 明治三年二月（二）日 墨書 一枚

三八四 任兵部権大丞 太政官 谷干城宛 明治四年四月（一九）日 墨書 一枚

三八五 軍務局分課被申渡 兵部省 谷干城宛 明治四年七月 墨書 一枚

三八六 免本官 太政官 谷干城宛 明治四年七月二八日 墨書 一枚

三八七 任陸軍大佐兼兵部権大丞 太政官 谷干城宛 明治四年七月二八日 墨書 一枚

三八八 兼任兵部少丞 太政官 谷干城宛 明治四年八月一五日 墨書 一枚

三八九 免兼官 太政官 谷干城宛 明治四年九月一三日 墨書 一枚

三九〇 鎮西鎮台第一分営出張被申付 兵部省 谷干城宛 明治四年九月一四日 墨書 一枚

三九一 兼任兵部少丞 太政官 谷干城宛 明治四年九月二五日 墨書 一枚

三九二 兼任兵部少丞 太政大臣三条実美 谷干城宛 明治四年九月二五日 墨書 一枚

三九三 鎮西鎮台第一分営出張被免、更ニ軍務局分課被申渡 兵部省 谷干城宛 明治四年九月二八日 墨書 一枚

三九四 大阪鎮台被差遣 兵部省 谷干城宛 明治四年一一月九日 墨書 一枚

三九五 軍務局分課被差除、近衛局勤務被申渡 陸軍省 谷干城宛 明治五年三月（二〇）日 墨書 一枚

- 三九六 陸軍裁判処長被申付 陸軍省 谷干城宛 明治五年四月(一四)日 墨書 一枚
- 三九七 任陸軍少將 太政大臣三条実美 谷干城宛 明治五年九月二日 墨書 一枚
- 三九八 叙従五位 太政大臣三条実美 谷干城宛 明治五年一〇月五日 墨書 一枚
- 三九九 熊本鎮台司令長官被仰付 陸軍省 谷干城宛 明治六年四月(五)日 墨書 一枚
- 四〇〇 叙正五位 太政大臣三条実美 谷干城宛 明治六年六月二五日 墨書 一枚
- 四〇一 台湾蕃地事務参軍被仰付 太政官 谷干城宛 明治七年四月五日 墨書 一枚
- 四〇二 御沙汰書 太政官 谷干城宛 (明治七年六月一八日) 墨書 一枚
蕃地出張、慰勞酒肴下賜、奮勵從事いたすべし。
- 四〇三 御用有之清国北京迄被遣 蕃地都督府 谷干城宛 明治七年一〇月二日 墨書 一枚
- 四〇四 帰朝被仰付 蕃地都督府 谷干城宛 明治七年一月一七日 墨書 一枚
- 四〇五 謹慎被仰付 陸軍卿山県有朋 谷干城宛 明治八年一二月二二日 墨書 一枚
熊本鎮台司令長官在職中下士官の免役手續き不備により謹慎五日。
- 四〇六 熊本鎮台司令長官被仰付 太政官 谷干城宛 明治九年一月九日 墨書 一枚
- 四〇七 御沙汰書 太政大臣三条実美 谷干城宛 明治一〇年三月(七)日 太政官野紙 墨書 一枚
西南戦争熊本城堅守、慰勞酒肴下賜、平定の功を奏すべし。
- 四〇八 御沙汰書 太政大臣三条実美 谷干城宛 明治一〇年五月(一三)日 太政官野紙 墨書 一枚
熊本城嬰守の軍勞を慰し、侍従長東久世通禧を差遣せられ酒肴下賜。
- 四〇九 御沙汰書 太政大臣三条実美 谷干城宛 明治一〇年七月二五日 墨書 一枚
賊勢退縮、歡感淺からず慰勞、平定の功を奏すべし。
- 四一〇 賊徒平定の功勞に関する勅語 谷干城宛 (明治一〇年一月一日) 墨書 一枚
- 四一一 勲二等年金六百円下賜御達書 太政官 谷干城宛 明治一〇年二月一五日 墨書 一枚

- (付) 賞勲局回送状 谷干城宛 明治一〇年二月一八日 賞勲局野紙 墨書 一枚
- 四一二 任陸軍中将 太政大臣三条実美 谷干城宛 明治一一年一月二〇日 墨書 一枚
- 四一三 熊本鎮台司令長官被免 太政官 谷干城宛 明治一一年二月一四日 墨書 一枚
- 四一四 東部監軍部長被仰付 太政官 谷干城宛 明治一一年二月一四日 墨書 一枚
- 四一五 諸兵指揮長官被仰付 太政官 谷干城宛 明治一二年六月二日 墨書 一枚
独逸皇孫御誘引飾隊式御回覧の節。
- 四一六 東部檢閲被仰付 太政官 谷干城宛 明治一二年九月二〇日 墨書 一枚
- 四一七 叙從四位 太政大臣三条実美 谷干城宛 明治一二年二月一六日 墨書 一枚
- 四一八 東部監軍部長被免 太政官 谷干城宛 明治一三年四月二九日 墨書 一枚
- 四一九 陸軍士官学校長兼陸軍戸山学校長被仰付 太政官 谷干城宛 明治一三年四月二九日 墨書 一枚
- 四二〇 選任会幹 斯文学会 谷干城宛 明治一三年六月(一二)日 墨書 一枚
- 四二一 中部監軍部長兼勤被仰付 太政官 谷干城宛 明治一三年八月九日 墨書 一枚
- 四二二 西部檢閲被仰付 太政官 谷干城宛 明治一三年九月一五日 墨書 一枚
(付) 別紙辞令御達 内閣書記官 谷干城宛 明治一三年九月一五日 太政官野紙 墨書 一枚
- 四二三 中部監軍部長兼勤被免 太政官 谷干城宛 明治一四年二月九日 墨書 一枚
- 四二四 賞杯辞令書 木杯下賜 太政官 谷干城宛 明治一四年三月一九日 墨書 一枚
東京府下和田倉門内の失火の節、罹災者へ金四〇円の施与を賞す。
- 四二五 賞杯辞令書 木杯下賜 太政官 谷干城宛 明治一四年二月二四日 墨書 一枚
愛日小学校資として金八〇円差出を賞す。
- 四二六 辞令并賞杯送付書 陸軍歩兵中佐児島益謙 谷干城宛 明治一四年二月一日 陸軍省野紙 墨書 一枚
(辞令なし)

- 四二七 祭主被仰付 太政官 谷干城宛 明治一六年八月一四日 墨書 一枚
長崎県下佐古へ改葬の軍人軍属の合葬に際して祭主を仰せつけらる。
(付) 別紙辞令御達 内閣書記官 谷干城宛 明治一六年八月一四日 太政官罫紙 墨書 一枚
- 四二八 補宮内省出仕 左大臣熾仁親王 谷干城宛 明治一七年五月二四日 墨書 一枚
- 四二九 学習院長被仰付 宮内省 谷干城宛 明治一七年五月二四日 墨書 一枚
- 四三〇 二等官年俸四千五百円下賜 太政官 谷干城宛 明治一七年五月二四日 墨書 一枚
- 四三一 華族被列 太政官 谷干城宛 明治一七年七月七日 墨書 一枚
(付) 勅書写 明治一七年七月七日 活版 一枚
- 四三二 公債証書金二万円下賜 宮内卿伊藤博文 谷干城宛 明治一七年一二月二七日 墨書 一枚
華族に列せらるにつき。
- 四三三 華族女学校長兼勤被仰付 宮内省 谷干城宛 明治一八年九月一四日 墨書 一枚
- 四三四 学士会員被仰付 宮内省 谷干城宛 明治一八年九月一六日 墨書 一枚
- 四三五 御用有之歐洲被差遣 太政官 谷干城宛 明治一八年一一月三〇日 墨書 一枚
- 四三六 任農商務大臣 内大臣三条実美 谷干城宛 明治一八年一二月二二日 墨書 一枚
- 四三七 御用有之歐洲被差遣 内閣 谷干城宛 明治一九年二月五日 墨書 一枚
- 四三八 叙正四位 内閣總理大臣伊藤博文 谷干城宛 明治一九年七月八日 墨書 一枚
- 四三九 叙従二位 内閣總理大臣伊藤博文 谷干城宛 明治一九年一〇月一九日 墨書 一枚
- 四四〇 露西亞国皇帝陛下贈与の勲章受領・佩用允許 賞勲局總裁柳原前光・元老院議官兼賞勲局副總裁大給恒 谷干城宛
明治一九年一〇月二九日 墨書 一枚
- 四四一 依願免農商務大臣 内閣 谷干城宛 明治二〇年七月二五日 墨書 一枚
- 四四二 学習院御用掛被仰付 宮内省 谷干城宛 明治二二年七月一三日 墨書 一枚

四四三 依願御用掛被免 宮内省 谷干城宛 明治二年一月五日 墨書 一枚

四四四 辞令御達 内閣總理大臣黒田清隆 谷干城宛 明治二年八月二六日 内閣野紙 墨書 一枚
(辞令なし)

四四五 退職恩給年額千四百円也 内閣 谷干城宛 明治二年一月八日 墨書 一枚

四四六 大日本帝国憲法發布記念章佩用式 内閣賞勲局 谷干城宛 明治二年一月 活版 一枚
(付) 届出心得 内閣賞勲局 明治二年一月 活版 一枚

四四七 土耳其国皇帝陛下贈与の勲章受領・佩用允許 賞勲局總裁柳原前光・賞勲局副總裁大給恒 谷干城宛 明治三年三月二七日 墨書 一枚

四四八 鐵道會議議員被仰付 内閣 谷干城宛 明治二五年一〇月一日 墨書 一枚

四四九 賞杯辞令書 木杯下賜 賞勲局總裁西園寺公望・賞勲局副總裁大給恒 谷干城宛 明治二六年五月二二日 墨書 一枚

明治二三年九月土佐国洪水の節罹災窮民救助として金五〇円の施与を賞す。

四五〇 貨幣制度調査会会長被仰付 内閣 谷干城宛 明治二六年一〇月二二日 墨書 一枚

四五一 褒状 賞勲局總裁西園寺公望・賞勲局副總裁大給恒 谷干城宛 明治二七年一月一〇日 墨書 一枚

明治二四年一〇月愛知県下震災の際、被害者教育救助として金五円の施与を賞す。

四五二 賞杯辞令書 木盃下賜 賞勲局總裁西園寺公望・賞勲局副總裁大給恒 谷干城宛 明治二七年一月一五日 墨書 一枚

明治二三年米価騰貴の節、貧民救助費として金一〇円の寄付を賞す。

四五三 賞杯辞令書 木盃下賜 賞勲局總裁西園寺公望・賞勲局副總裁大給恒 谷干城宛 明治二七年二月二日 墨書 一枚

明治二四年一〇月震災の節、金二〇円の施与を賞す。

(付) 辞令書・賞杯拝受証書式見本 賞勲局 一枚

四五四 依願鐵道會議議員被免 内閣 谷干城宛 明治二七年二月二日 墨書 一枚

- 四五五 大婚二五年祝典之章佩用式 賞勳局 谷干城宛 明治二七年三月 活版 一枚
(付) 届出心得 賞勳局 明治二七年三月 活版 一枚
- 四五六 賞杯辞令書 木杯下賜 賞勳局総裁西園寺公望・賞勳局副総裁大給恒 谷干城宛 明治二七年一〇月三日 墨書一枚
高知県より愛媛徳島両県に通ずる新道開鑿、浦戸港浚渫費二〇〇円の寄付を賞す。
- 四五七 京都遷都千百年祭出銀賞 協賛会総裁彰仁親王・協賛会会長近衛篤磨 谷干城宛 明治二八年四月一二日 墨書一枚
- 四五八 終身会員証 東京府教育会長岡部長職 谷干城宛 明治三二年九月二四日 墨書 一枚
金二〇円の寄付につき。
- 四五九 賞杯辞令書 木杯下賜 賞勳局総裁大給恒 谷干城宛 明治三二年一月二日 墨書 一枚
明治二九年六月三日三陸海嘯の際、罹災者へ金一五円の救恤を賞す。
- 四六〇 賞杯辞令書 木杯下賜 賞勳局総裁大給恒 谷干城宛 明治三二年九月三〇日 墨書 一枚
麹町区富士見尋常高等小学校改築費三〇円の寄付を賞す。
- 四六一 賞杯辞令書 金杯下賜 賞勳局総裁大給恒 谷干城宛 明治三二年一〇月二四日 墨書 一枚
貨幣法改正の勲勞につき。
(付) 大蔵大臣秘書官送付状 谷干城宛 明治三二年一〇月二四日 蒟蒻版 一枚
- 四六二 賞杯辞令書 木杯下賜 賞勳局総裁大給恒 谷干城宛 明治三四年五月一日 墨書 一枚
新道開設費として金一〇〇円寄付につき。
- 四六三 第九号事件評議委員被仰付 宮内省 谷干城宛 明治三五年二月一七日 墨書 一枚
- 四六四 第一二号事件評議委員被仰付 宮内省 谷干城宛 明治三七年九月一七日 墨書 一枚
- 四六五 賞杯辞令書 木杯下賜 賞勳局総裁大給恒 谷干城宛 明治四〇年四月九日 墨書 一枚
明治三七・八年戦役の際、従軍者家族扶助の為金一〇三円余寄付を賞す。

四六六 謝状 日本弘道会会長徳川達孝 谷干城宛 明治四〇年二月二三日 墨書 一枚

基本金五〇〇円の寄付を謝す。

四六七 賞杯辞令書 木杯下賜 宮城県知事亀井英三郎・福島県知事平岡定太郎・岩手県知事笠井信一 谷干城宛 明治四一年二月一日 墨書 一枚

明治三八年県下凶作の際、金三〇円の寄付を賞す。

四六八 感謝状 日本弘道会会長徳川達孝 谷干城宛 明治四一年五月三日 墨書 一枚
弘道会会長の功績を謝す。

四六九 賞杯辞令書 木杯下賜 賞勳局総裁正親町実正 谷干城宛 明治四二年一月七日 墨書 一枚
明治四一年三月高知県土佐郡初月尋常小学校改築費一二〇円寄付を賞す。

四七〇 病氣見舞菓子折下賜 宮内大臣田中光顕 谷干城宛 明治四二年三月一四日 墨書 一枚

四七一 授旭日桐花大綬章 賞勳局 谷干城宛 明治四四年二月九日 墨書 一枚

四七二 感謝状 群馬県邑楽郡郷谷村惣代越澤丑次郎 他 谷干城宛 明治四四年三月 墨書 一枚
渡良瀬川沿岸地方特別地価修正漏の請願に関し非常なる御尽力を謝す。

四七三 位一級被進 宮内省 谷干城宛 明治四四年四月一五日 墨書 一枚

四七四 叙正二位 宮内大臣渡辺千秋 谷干城宛 明治四四年四月一五日 墨書 一枚

四七五 病氣見舞菓子折下賜 東宮大夫村木雅美 谷干城宛 明治四四年四月一五日 墨書 一枚
病氣御尋、皇太子殿下より菓子折下賜。

四七六 病氣見舞菓子折下賜 宮内大臣渡辺千秋 谷干城宛 明治四四年四月一五日 墨書 一枚
病氣御尋、天皇皇后両陛下より菓子折下賜。

四七七 病氣見舞菓子折下賜 有栖川宮使 谷干城宛 明治（四四）年四月一七日 墨書 一枚
病氣御尋、有栖川宮殿下より菓子折贈らせらる。

四七八 酒肴料 金二五円 谷干城宛 明治 墨書 一枚

四七九 辞令書・賞杯拝受証書式見本 賞勲局 谷干城宛 明治 活版 同文二枚

家族宛（四八〇～四八五）

四八〇 賞杯辞令書 木杯下賜 賞勲局総裁大給恒 谷玖満子宛 明治三〇年六月一日 墨書 一枚

明治二七・八年戦役の際、有志共同軍用品献納を賞す。

四八一 爱国婦人会理事嘱託 爱国婦人会総裁載仁親王妃智恵子 谷玖満子宛 明治三七年一〇月一〇日 墨書 一枚

四八二 婦人部委員嘱託 帝国海事協会総裁威仁親王 谷玖満子宛 明治三七年一月二六日 墨書 一枚

四八三 褒状 和歌山県知事冲守固 谷芳子宛 明治二八年七月一日 墨書 一枚

明治二五年一二月和歌山県熊野冲遭難漁民救恤として金一円寄贈を賞す。

四八四 褒状 和歌山県知事冲守固 谷松子宛 明治二八年七月一日 墨書 一枚

明治二五年一二月和歌山県熊野冲遭難漁民救恤として金一円寄贈を賞す。

四八五 贈正五位 宮内大臣波多野敬直 故谷重遠宛 大正八年一月一五日 墨書 一枚

（付）贈位記 宮内省 故谷重遠宛 大正八年一月一五日 墨書 一枚

（付）交付書 井上勝之助 谷儀一宛 大正八年一二月四日 宮内省野紙 墨書 一枚

谷乙猪宛（四八六～四九二）

四八六 谷乙猪卒業証書 同人社主中村正直 谷乙猪宛 明治一三年七月二〇日 墨書 一枚

英学変則普通科卒業。

四八七 神奈川・静岡両県出張被仰付 太政官 谷乙猪宛 明治一六年四月八日 墨書 一枚

船舶出入取扱実地視察のため。

四八八 制度取調局兼勤被仰付 太政官 谷乙猪宛 明治一七年四月一六日 墨書 一枚

四八九 御用掛被仰付 太政官 谷乙猪宛 明治一七年四月一六日 墨書 一枚

奏任に准じ、月俸三〇円下賜。

四九〇 叙従五位 左大臣熾仁親王 谷乙猪宛 明治一七年一〇月三日 墨書 一枚

四九一 引続三重県下迄出張被仰付 太政官 谷乙猪宛 明治一八年四月二日 墨書 一枚
船舶出入取扱実地視察のため。

(付) 辞令書回送状 制度取調局 谷乙猪宛 明治一八年四月二日 制度取調局野紙 墨書 一枚

四九二 伊藤博文随行被仰付 宮内省 谷乙猪宛 明治一八年七月二〇日 墨書 一枚
御巡幸供奉参議伊藤博文随行。

その他

四九三 「俱利伽羅龍三所物折紙」 光晃 天保一一年三月七日 墨書 一枚

四九四 大坂鎮台兵隊表 明治(六)年 墨書 一枚
大坂鎮台附属参謀科并会計部。

四九五 観菊会取調の件申入 明治一六年一月三日 蒔莢版 一枚
「十五年已上之令娘」 名前御答のこと申入。

四九六 秋期大射の会案内 東京共同射的会社 谷干城宛 明治一六年一月 活版 二枚

四九七 官幣中社金鑽神社臨時宮繕費御下附御改造願 金鑽神社宮司堀越弥三郎 品川弥二郎宛 明治二四年六月一五日
社務所野紙 墨書 一綴

(付) 「官幣中社金鑽神社御改造真図」 印刷 一枚

四九八 唐崎老松保存義捐金募集趣意書 中西秀夫・宇津木久岑・森伊郷 谷干城宛 明治二七年二月 謄写 一枚
(付) 「唐崎老松」(絹布水墨画) 印刷 一枚

四九九 『毎日新聞』号外 明治二七年一月二二日 活版 一枚
「大本営近傍の出火」

五〇〇 『二六新報』 明治三七年三月二三日 活版 一枚
「論評 露国を中腹より覆す可し」

五〇一 谷中命名書 谷干城 明治四一年八月二十九日出生 墨書 一枚

五〇二 「維新志士遺墨展覽會記念」 絵はがき 国民新聞社 明治四三年一月 三枚

五〇三 「鉄道乗車之券」 鉄道院総裁後藤新平 谷干城宛 明治四四年三月二〇日 活版 一枚
「期間自明治四四年三月二〇日至明治四四年七月一〇日」

五〇四 高山正之遺墨折紙 矢嶋行康 谷干城宛 明治 墨書 一枚
楠公甲切。

五〇五 神武天皇祭・明治天皇祭桜菊会會員名簿 大正六年一二月末日調 活版 一枚
(一部欠)

五〇六 十体書 成瀬温 印刷 一枚
十体書形。

五〇七 「参集人名」 墨書 一綴
仙台市・名取郡書記・名取郡県會議員 他。

五〇八 広告類 活版 三枚
将棋の盤(紅葉館)、薬王神農艾、寶扇堂扇子。

谷秦山二〇〇年祭

五〇九 祭詞 秦山会総代・鏡野尋常高等小学校長徳弘正素 大正九年三月三十一日 墨書 一枚

五一〇 祭詞 山田町協賛会長・山田町長松尾富功祿 大正九年三月三十一日 墨書 一枚

五一一 祭辞 高知県知事阿部亀彦 大正九年三月三十一日 墨書 一枚

五一二 祭文 青年会代表西村健吉 大正九年三月三十一日 墨書 一枚

五一三 祭文 後裔谷流水 大正九年三月三十一日 墨書 一枚

谷儀一關係書類

日中戦争関係

- 五二四 「北大営附近日支両軍衝突ノ梗概」 關東軍參謀部 昭和六年九月一日攻撃記念 活版 一枚
(付) 九月一八日夜に於ける北大営附近經過要図 印刷 一枚
- 五二五 支那事变戦況談覚 谷儀一 昭和(二三)年 鉛筆 一綴(二一枚)
蔣の直系軍、共産党の政策、我が占領地の状況、張鼓峰事件後ソ連国境の状況、新軍の編成。
- 五二六 支那事变戦況談覚 谷儀一 昭和(二三)年 鉛筆 一綴(九枚)
広東攻略について。
- 五二七 支那事变戦況談覚 谷儀一 昭和(二三)年 鉛筆 三枚
史料「五一六、支那事变戦況談覚」の草稿。
- 五二八 支那事变戦況談覚 谷儀一 昭和(二三)年 鉛筆 一綴(三枚)
海軍広東攻略 他。
- 五二九 支那事变戦況談覚 谷儀一 昭和(二三)年 鉛筆 一綴(八枚)
海軍海戦の状況、中国、列国情勢 他。
- 五二〇 支那事变戦況談覚 谷儀一 昭和(二三)年 鉛筆 一綴(五枚)
広東占領。

谷儀一写真

- 五二一 学習院陸軍将校志願者懇親会員写真 明治三二年一月一二日 武林写真館台紙 一枚
- 五二二 陸軍士官学校時代写真 明治三六年頃 武林写真館台紙 一枚
- 五二三 谷儀一写真 明治三七年二月一九日 佐藤華江台紙 一枚
- 五二四 谷儀一写真 明治三七年 日露戦争従軍の頃 佐藤華江台紙 一枚

- 五二五 日露戦争負傷時写真 谷儀一 明治(三七)年 三枚
- 五二六 谷儀一・谷サト写真 明治四〇年頃 K.Ogawa 台紙 一枚
- 五二七 「軍旗授与記念日ニ於ケル写真」 明治四一年一月二三日 一枚
- 五二八 「近衛歩兵第二聯隊第六中隊満期帰休除隊兵」写真 明治四一年一月 塚本楊東製台紙 一枚
- 五二九 谷儀一他集合写真 明治四一・四二年頃 一枚
- 五三〇 谷儀一・谷中写真 明治四三年五月一六日 長谷川写真館台紙 一枚
- 五三一 谷儀一写真 近衛聯隊時代 御殿場 杉山写真館台紙 一枚
- 五三二 谷儀一他写真 大正六年十月三十一日 長谷川写真館台紙 一枚
- 五三三 第一師団幕僚判任団写真 昭和三年四月一〇日 嶋津孝台紙 一枚
- 五三四 櫻 水櫻会記念写真 昭和三年一二月六日 一枚
- 五三五 「華族会館ニ於テ櫻・水櫻会ニ御台臨ノ四宮殿下及学習院生徒記念撮影」
- 五三六 「富士裾野演習記念」写真 昭和 昭和 拓殖大学服務時代 一枚
- 五三七 櫻会記念写真 昭和七年一月八日 一枚
- 五三七 「華族会館ニ於テ櫻会總會并ニ新年会ニ台臨ノ五宮殿下及會員記念撮影」
- 五三八 「於青森陸軍官舎 慰安送別茶話会」写真 昭和七年四月一七日 柴田兄弟写真館台紙 一枚
- 五三八 歩兵第五聯隊集合写真 昭和(七)年 柴田兄弟写真館台紙 一枚
- 五三九 従軍記念集合写真 昭和 一枚
- 五四〇 谷儀一写真 昭和九年四月 一枚
- 五四一 谷儀一写真 昭和(九)年 一枚

谷儀一写真アルバム類

五四二 拓殖大学服務時代写真一括 谷儀一 昭和四年より昭和七年三月頃 一冊（二〇枚）

拓殖大学学生集合写真、軍事教練 他。

五四三 満州派遣時代写真帳一 谷儀一 昭和七年より昭和八年頃 一冊

青森歩五聯隊に着任の式、山海関、熱河作戦、承德離宮正門、支那河北省密雲及懷柔附近 他。

五四四 満州派遣時代写真帳二 谷儀一 昭和七年より昭和八年頃 一冊

綿州の停車場にて、昭和七年四月一〇日大連上陸の日埠頭にて、綿州師団指令部軍事会議、興城守備隊本部にて、当地の女学校の教室 他。

五四五 満州派遣時代写真帳三 谷儀一 昭和七年より昭和八年頃 一冊

熱河進軍雪中行軍、熱河山地における攻撃、熱河車輛の難行軍、豊寧北側の高地、飛行機にて秦王島に出発する処、歩兵第五聯隊満洲事変戦役勇士之碑 他。

五四六 満州派遣時代写真帳四 谷儀一 昭和七年より昭和八年頃 一冊

承德市を通過中のらくだ、満州風俗、支那軍の装甲列車、河北戦の際我飛行機の爆弾を受けた家 他。

五四七 満州派遣時代写真帳五 谷儀一 昭和九年頃 一冊

満州事変発生の地、熱河省、新京軍司令部、北満鉄道及其附近、奉山鉄道警備中写真 他。

五四八 満州派遣時代写真一括 谷儀一 昭和七年より昭和九年頃 一冊（六一枚）

満州風俗、風景、行軍 他。

（注）満州時代写真帳一〜五より脱落写真。

五四九 満州派遣時代写真一括 谷儀一 昭和八年頃 一冊（二六枚）

承德離宮写真 他。

（注）満州時代写真帳三より脱落写真。

五五〇 谷儀一関係写真 昭和 二枚

（一）集合写真 一枚

(2) 辰馬猛(儀一長女妙子の夫) 写真 昭和十一年三月 一枚

五五二 『從軍』 関東軍司令部 昭和七年二月二〇日 写真帖 一冊

昭和六・七年満州事変関東軍記念写真帖。

五五二 『從軍』 陸軍恤兵部 昭和八年六月二〇日 写真帖 一冊

昭和六・七年満州事変関東軍記念写真帖。

履歴関係

五五三 「東宮沼津行啓供奉ヲ命ス」 宮内省 御学友谷儀一 明治二六年七月一七日 墨書 一枚

五五四 士官候補生願控 谷儀一 第一師団長 川村景明宛 明治三三年 墨書 一綴(五枚)

士官候補生志願御許可願う。身元明細書・同書式、戸籍明細書・同書式。

五五五 婚姻願 谷儀一 陸軍大臣 岡市之助宛 大正三年一月一四日 墨書 一枚

五五六 婚姻認許書 宮内大臣波多野敬直 谷儀一宛 大正三年一月二六日 宮内省野紙 墨書 一枚

曾我祐準養女文との婚姻認許書。

五五七 「金鵒勲章年金之証」 賞勲局総裁下条康麿 谷儀一宛 昭和九年四月二九日 墨書 一枚

(付) 勤務所得に関する申告申請書 活版 一枚

五五八 貴族院議員辞職御允裁通知 徳川圀順 谷儀一宛 昭和二年三月一四日 大日本帝国政府野紙 タイプ 一枚

陸軍兵籍

五五九 陸軍兵籍 谷儀一 昭和 墨書 二枚

明治三四年より昭和一〇年予備役編入まで。

五六〇 陸軍兵籍 谷儀一 昭和 ペン 二枚

明治三四年より昭和一〇年までの履歴。

五六一 履歴書 谷儀一 昭和 陸軍野紙 ペン 二枚

明治三七年より昭和九年までの履歴。

五六二 陸軍戦時名簿 谷儀一 昭和 ペン 二枚

明治三四年より昭和一〇年までの履歴。

その他

五六三 鉄馬殿後見に関する願書 浅野芳子 大正四年八月一六日 墨書 一枚

諸般の家務処理につき宗家指揮監督の承認を願う。

五六四 家屋取得届控 谷儀一 東京府知事宛 昭和一九年五月二日 ペン 一綴

下落合住居。

(付) 淀橋税務署送付書 谷儀一宛 昭和一九年五月二六日 謄写 一枚

五六五 第一五期士官候補生会会規・名簿 昭和三六年五月三一日 謄写 一冊

五六六 谷儀一覚書 谷儀一 鉛筆 一綴(一〇枚)

保存書簡人名書上。

五六七 「李王世子殿下ヨリ賜フ」 大正六年七月 墨書 一点

(封筒のみ)

祖先關係史料

祖先書翰

- 五六八 渋川春海書翰 谷丹三郎重遠（秦山）宛 （元禄一〇）年八月七日 墨書 一通
中村御拝領御祝儀、元服束冠のこと、講日相延のこと。
- 五六九 渋川春海書翰 谷丹三郎重遠（秦山）宛 （元禄一〇）年八月二十九日 墨書 一通
神代上巻加朱済。御講談承りたし。
- 五七〇 渋川春海書翰 谷丹三郎重遠（秦山）宛 （元禄一〇）年一〇月八日 墨書 一通
一〇月六日書狀の別紙、吉田玄宿老の便、頃日相届。拾遺などのこと。
- 五七一 谷丹三郎重遠書翰写真 出雲路民部信直宛 （元禄一五）年二月二十六日 写真 一枚
私儀学問、聞及ばれ、扶持申しつけらる。神慮畏み奉る。
- 五七二 出雲路民部信直書翰写真 谷丹三郎重遠（秦山）宛 （元禄一五）年五月二二日 写真 一枚
御扶持遣わされ大慶、御神供二品めでたく頂戴ならるべし。
- 五七三 三宅丹次書翰 谷丹四郎垣守宛 一月七日 墨書 一通
御越歳目出たし。
- 五七四 三宅丹次書翰 谷丹四郎垣守宛 五月六日 墨書 一通
去秋御加恩。講書、御教授。太守様にも講書御聴。今年も江戸御供、御東行。積病甚だし。
- 五七五 三宅丹次書翰 谷丹四郎垣守宛 六月一六日 墨書 一通
太守様御帰国御供、伏見表御通。
- 五七六 谷丹三郎重遠書翰 弥三右衛門宛 一一月三日 墨書 一通
今度の御仕合千秋万歳目出たし、名付親にも相成べし。

祖先書類

- 五七七 文天祥「正気歌」 谷丹三郎筆 元禄八年暮春 墨書 一卷

五七八 秦山漢詩 谷丹三郎 板垣氏宛 元禄一一年冬至 墨書 一枚

秦山漢詩写。

五七九 山内豊雍公御自筆御書付 山内豊雍 天明七年九月 墨書 一枚

御勝手向困窮、十万石格願出。

五八〇 山内豊雍公御自筆御書付 山内豊雍 (天明七)年頃 墨書 一枚

窮迫物入り重なり、国主の訳相立ず。当末より何事も省略。

五八一 秦山略歴 墨書 一枚

「人名辞書」